

## 第四節 對 露 交 涉

明治二十七年二月六日

陸奥外務大臣  
露國公使  
對話筆記

### 條約改正ニ關スル件

大臣 條約改正ノ件ニ付テハ先般來度々好意上ノ談話モアリタレハ本日ハ該件ニ關シ極メテ秘密ニ且ツ一己人ノ資格ヲ以テ内話ヲ爲サント欲スル旨ヲ述ヘ語ヲ續ケテ云ク日露兩國間ノ條約問題ニ至ツテハ既ニ先年大隈伯當職ノ時代ニ締結シタルモノアリテ存スレハ單純ニイヘハ此成約ニ兩國皇帝陛下ノ批准ヲ乞フマテニテ事濟トナルヘケレトモ貴公使ニモ詳知ノ如ク日本ノ情況モ大隈伯在職ノ頃ヨリ以來大ニ變遷シタル所アレハ過日面晤ノ節ニモ申述ヘタルカ如ク到底先年ノ成約ヲ其儘施行スル譯ニハ參リ難シ就テハ帝國政府ニ於テハ之ニ對シ重要ノ修正ヲ加ヘタシト望ミ居シリ抑大隈伯在職ノ日ニ當リテ貴國外獨米トノ三ヶ國ニ向テハノ新條約ニ調印シ最早批准ヲ得ル迄ニ進ミ居リ又英國ニ

シ即チ貴國政府ニ於テ前陳ノ趣旨ニ基キ成約ヲ修正スルコトヲ許諾セラル、意アルヤ否ヲ貴公使ヨリ貴國政府ニ問合ハセラレタキコト是ナリ

露公使 兼テヨリ申述居リシ如ク本使ニ於テハ現行條約ノ非ナルコトヲ熟悉シ居レハ之力改正ニ關シ應分ノ斡旋盡力スルコトハ固ヨリ辭セサル所タルコトハ今日茲ニ之ヲ明言スルコトヲ得ヘシ本使一己人ノ意見トシテハ貴國今日ノ情況ニテハ所詮對等條約ヲ締結スルノ外ナシト思考セリ露國政府ノ望ム所ハ貴國ニ於テ他ノ外國ニ與ヘラル、所ト同一ノ權利特典ヲ露國ニモ與ヘラル、コトヲ欲スルニ過キス故ニ苟モ他ノ外國ニ比シテ劣等ノ待遇ヲ享ケサル以上ハ貴國政府ノ請求ヲ容ル、ニ躊躇セサルヘシ尙ホ詳言スレハ露國政府ノ望ハ貴國ニ於テ最惠國待遇ヲ受ケントスルニ在リ右ニ付本國政府ノ意嚮ヲ問合ハスコトニ付テハ電報ヲ以テスルモ不可ナケレトモ電文ニテハ十分ニ意味ヲ盡スコト能ハサルヘケレハ信書ヲ以テセサルヘカラス左スレハ右往復少クトモ三ヶ月ノ日子ヲ要スベシ

大臣 信書ヲ以テ問合ハセラル、モ電信ニテ其回答ヲ得ルコト出來間敷ヤ將又若シ貴公使ニ於テ望マル、ナラハ修正

向テハ青木子在職ノ頃ヨリ縣案ノ姿ニ相成居リタル本問題ニ關スル談判ヲ目下繼續開談中ナリ固ヨリ未夕調印ヲ爲ステ右英政府ト談判中ノ改正案ハ全ク對等主義ヲ以テ基礎トセシモノナレハ貴國トノ成約ニモ此主義ニ因リテ修正ヲ加ヘタシトノ帝國政府ノ期望ニ有之貴公使カ今日迄ノ談話ハ一己人トシテノ意見ナル旨申述ヘラレタレトモ去追又貴公使ノ意見ト貴國政府ノ意思ト全ク相反シ居ルコトモ思ハレス因テ此際若シ貴公使ノ協力ヲ得テ以テ満足ニ此改正事業ヲ完成スルコトヲ得ハ實ニ帝國政府ノ大幸ト謂フヘク加之儻シ貴國政府ニ於テ帝國政府ノ需ニ應シ現存ノ成約ニ相當ノ修正ヲ加フルコトニ同意ヲ表セラル、ニ於テハ他締盟國ニ於テモ亦タ其例ニ倣ヒ帝國政府ノ請求ヲ容ル、ニ至ルヘキハ必然ノコトト信スレハ貴國政府ニ於テ從來ノ好意ヲ推廣シ此好例ヲ示サレンニハ帝國政府ノ感謝スル所ナリ就テハ本日貴公使ノ居仲周旋ヲ煩ハサント欲スルモノハ他ナ

ヲ要スル要點丈ヲ簡單ニ書面ニ列記シ内見ニ供シテモ宜シ又彌ヨ開談ノ運ニ至ラハ其談判ヲ露京ニ於テスルモ又ハ東京ニ於テスルモ其邊ハ全ク貴國政府ノ望ニ一任スヘシ露公使 電信ニテ回答ヲ得ルコトハ承知セリ然シ夫レニテモ二ヶ月位ハ要スルナルヘシ又本日ノ談話ハ内密且ツ一己人トシテノ談話ナリトノコトナレトモ本國政府ノ意嚮ヲ問合ハヌタメニハ外務大臣ヨリ條約改正事件ニ付内話ノ趣アリタルコト及露國ニ對シ最惠國待遇ヲ與フヘキ帝國政府ノ意思ナリトノコトヲ本國政府ヘ申報シテ宜シキヤ

大臣 固ヨリ異議ナシ

西公使宛往信第四號ヨリ看テ明治二十七年陸奥外務大臣トノ對話ナルコト明ナリ

明治二十七年二月六日 陸奥外務大臣  
西駐露公使宛(往電)

### 對露改訂問題ニ關スル件

At the hint several times made by Hitrowo to revise or modify the Russian Treaty already signed on the principle of reciprocity I have signified our willingness to do so if Russian Government accede

thereto. It appears he has telegraphed to his Government for instructions. You will bear this in mind in case they refer the matter to you.

February 16th 1894. Mutsu.

三三四 明治二十七年二月十六日 陸奥外務大臣臣ヨリ 西駐露公使宛

**條約改訂問題ニ付露公使ト内談ノ件**

送第四號 條約改正ニ關スル件（第一）

本月十六日電信ニテ大略及御通報置候通本邦駐劄露國公使ヒトロ・ヴォー氏ニハ是迄本大臣ト晤談ノ度コト動モスレハ常ニ東洋政略問題等ヲ説起シ延ヒテ我國條約改正問題ノコトニ話及シ該問題ニ關シ若シ其居伸斡旋ヲ要スルコトアレハ何時ニテモ喜テ應分ノ盡力スヘント類リニ我ヨリ彼ニ向テロヲ開クコトヲ待ツカ如タニ懇話有之候ニ付本大臣ニハ彼ノ我ヲ迎フヲ幸ニ機ヲ將テ機ニ就キ過日同氏ニ面晤シ抑日露間ノ條約問題ニ至テハ既ニ先年雙方ノ調印ヲ畢リタルモノアリテ存スレハ單純ニ言ヘハ此成約ニ批准ヲ經ルマテニテ事濟ムヘケレトモ日本國內ノ情況モ其頃以來大ニ變易シタルトコロアレハ今日ノ勢到底先年ノ成約ヲ其儘施行ス

度候  
右至急申進候 敬具

三三五 明治二十七年二月三日 陸奥外務大臣ヨリ 西駐露公使宛

**條約改正ニ對スル露國政府ノ態度ニ關スル件**

送第六號 條約改正ニ關スル件（第二）

條約改正問題ニ付過日在本邦露國公使ト對話ノ末同公使ヨリ電信ニテ露國政府ノ意嚮ヲ問合ハス答ニ相成居候旨前信ニテ申遺置候處同公使ニハ其約束ニ從ヒ本國政府へ發電致候由ノ處右ニ對シ答電有之候由ニテ昨日日本大臣ヲ來訪シ露國政府ニテハ本問題ニ關スル談判ハ他國ニ率先シテ着手スルコトヲ好マサルモノノ如シ要スルニ答電ノ趣意ハ自分ニ於テモ満足セサル所アリトノコトニ付本大臣ハ之ニ對シテ然ラハ過日貴公使迄御内話致置候夫ノ現ニ英國政府ト引續キ談判中ニ有之候事實ヲ更ニ改メテ公然言明致候ハ、露國政府ニ於テ開談ノ一事ヲ承諾セラレ候義ニ候ト相尋候處多分然ラントノコトニ付本大臣ハ又透サス斬込テ然ラハ鬼ニ角露國政府ハ已ニ調印濟ニ相成居ル成約ニ修正ヲ加フル

ル譯ニハ參リ難キ事情有之先年大隈伯在職ノ日ニ當リテ無此上大幸ニ有之候旨及内話候處同公使ノ答ニ同氏一己人ノ意見トシテハ日本帝國今日ノ情況ニテハ所詮對等條約ヲ締結スルノ外之ナカルヘク露國政府ノ望ム所ハ日本ニ於テ他ノ外國ニ與ヘラル、所ト同一ノ權利特典ヲ露國ニモ與ヘラル、コトヲ欲スルニ過キサルカ故ニ苟モ他ノ外國ニ比ンテ劣等ノ待遇ヲ享ケサル以上ハ帝國政府ノ需ニ應スルニ躊躇セサルベシト思考ス兎ニ角電信ニテ本國政府ノ意嚮ヲ問合ハスヘシト申居候前述ノ如キ行掛リニ相成居候ニ付右御含蓄相成若シ露國政府其筋ノ人ニヨリ我條約改正問題ニ關スル話出候ハ、其心持ニテ帝國政府ノ希望ヲ達スヘキ様程能ク御應答相成様致

コトヲ應諾セラレタルモノナルヤト問詰メ候處夫レハ應諾スルノ意ナリト思考ス實ハ自分ヨリ本國政府へ申立置候事有之候得共其書簡ハ今二週間モ不相立候テハ露京ニ相達シ申間敷就テハ右書簡ヲ本國政府ニテ接手セシ頃ヲ見計ヒ更ニ電信ニテ本國政府へ稟申ニ及フヘケレハ其節ニハ當方ヨリモ閣下ヘ電信ヲ送リ共々照應斡旋被致候翼望ストノコトニ付本大臣ハ之ヲ承諾致置候就テハ本信御接受ノ前電信ニテ何分ノ義申遣候事モ可有之ト存候將又帝國政府カ今回英國政府ニ向テ提出セシトコロノ約案ハ別冊（即チ條約案議定書案外交文書案及約定稅目案ノ四種）ノ通ニ有之候得共露國ニ對シテハ先年已ニ調印マテ終リシトコロノ成約有之候得ハ帝國政府カ今日露國政府ニ望ム所ハ或ハ新タニ英國政府ニ向テ提出セシモノト同様ノ條約ヲ締結スルナリ又或ハ既結ノ成約ニ新提案ノ主義ニ因リタル重要ノ修正ヲ加フルナリ兩者ノ一ヲ擇フコトハ全ク露國政府ノ都合ニ一任スヘケレハ只タ純然タル互相對等ノ條約ヲ締結スルコトヲ肯諾アリタシトイフニ外ナラス候且又別紙要領書ハ帝國政府カ修正ヲ要スル要點ノミヲ簡單ニ列記セシモノニシテ即チ過日本大臣ヨリ同公使ノ内見ニ入レ

候モノニ有之候ニ付御参考迄ニ差進候  
右申進候 敬具

逐テ相添置候「輸入品稅目」「最近三ヶ年間各國ヨリ  
輸入重要品表」及「直接ニ約定稅目ノ範圍ニ屬スヘキ  
物品ヲ示ス表目」ノ三種ハ約定稅目調製ノ參考ニ供候  
モノニ有之是亦併セテ御参考迄ニ差進候

註 添附書類見當ラス

三三六 明治二十七年四月十三日 西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛

露國政府ノ態度ニ付報告ノ件

第五號 五月二十八日到

機密第六號ヲ以テ條約改正ニ關シ新條約案并ニ約定稅目案  
等ヲ添ヘ御申越ノ趣承知イタシ候右改正事件ニ付テハ是迄  
拙官ニモ當地ノ外務省ニ於テ内話シタル事モ有之候ヘ共此  
方ハ大體上既ニ濟ミ居ル事ナレハ先ツ未タ濟マサル他國ト  
御談合ノ結果ヲ俟ツヘシトノ趣ヲ以テ答ヘ何ツモ之ヲ避ク  
ル風ナリシユヘ別ニ取詰メテ話モ致サス候然處今度御贈り  
ノ書類ニ依テ新提出案ノ要領ヲ得候付今一往意見ノ交換

新條約案ニ通御贈附相成度此段申進候 敬具

明治二十七年四月十二日

特命全權公使 西 德 二 郎

外務大臣 陸 奥 宗 光殿

追テ瑞典ハ本邦ノ事ニ關シテハ常ニ蘭國ニ傲ヒ候ヘハ  
蘭ノ方濟マサル間ハ多分扣ニヘシト存シ候ヘ共若瑞典  
ノ方モ拙官ヘ御委任可相成候ハ、其方ノ佛文條約案モ  
御送リ相成度此段爲念申添置候也

三三七 明治二十七年五月三日 西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛

露國トノ交渉方針ニ關スル件(第四)

送第十二號 條約改正ニ關スル件(第四)

條約改正ノ件ニ關シ四月十二日附貴信ヲ以テ縷々御來示ノ  
趣致閱悉候閣下ノ御盡力ニ依リ露國政府カ本問題ニ對スル  
意嚮モ明瞭ニ相成本大臣ニ於テモ大ニ満足ニ存候已ニ過日  
第三信ヲ以テ申遣候通リ英國政府トノ談判モ餘程拂リ來リ  
調印ノ域ニ達スルコトモ最早程遠カラスト存候ニ付テハ露  
國政府ニ向テ開談スヘキ時機モ不遠到來可致尤右談判ヲ東

ヲ試ント欲シテ過日アジャ局長ニ面會シ我新所望ノ必要ヲ  
陳ヘ且之ニ關シテ在東京ヒトロウオ公使ヨリノ來意ヲモ尋  
ニ候處同局長ノ答ヘニヒトロウオ公使ヨリモ書面并ニ電信  
ヲ以テ略々同様ノ趣ヲ申越シタルモ此方ニ於テハ實ハ貴國  
ノ他國ト始メラレタル談判ノ終ルヲ俟チ新舊兩條約間ニ生  
スル差別ヲモ見タル後ニスル積リナルニヨリ其趣ヲ以テ答  
へ置ケリ何レニシテモ今回ハ此方ニ於テハ他國ニ率先シテ  
談判スル儀ハ見合ハスヘシトノ趣意ニテ有之候就テハ拙官  
ニハ強テ之ヲ求メモ致サス唯假令率先セラレストモ率先ノ  
國ニ次テ開談ヲ承諾セラルヘキハ拙者ノ信スル所ニシテ且  
追々其機會ノ到来スヘシト存スルニヨリ其時ニ至テ事ノ早  
ク捌ケル様前ニ陳ヘタル我新所望ノ必要ナル點ハ預メ善ク  
認置吳ラレ度段申置候右局長ハ扣ヘ目強ノ風ノ人ニテ有之  
候ユヘヒトロウオ公使ノ申立モ容レラレサリシモノト相見  
ヘ候ヘ共英國ノ方捌ケ候上ハ此方ニ於テ其通リノ新約ヲ結  
ヒ代ヘルナリ又ハ既結ノ舊約ヲ新約主義ニ修正スルナリ其  
一ヲ當國ノ<sup>(マ)</sup>撰ヒニ任セテ相談ヲ纏ムルハ難事ニ非ルヘシト  
存シ候間若爾々此地ニ於テ拙官ヘ右ノ談合及調印ヲ委任セ  
ラレ候ヘハ條約文句ノ錯謬到來セサル様可成速カニ佛文ノ

ヲ締結シ其他ノ諸國ニ對シテハ別ニ稅目ヲ約定セス最惠國條款ノ作用ニ依リテ低稅ノ便益ニ均霑セシムル方法ニ有之

候  
瑞典國ニ對スル談判モ同ク閣下ニ御委任ノ事ニ可相成ト存  
候即右参考ノ爲メ別紙取調表三通茲二併セテ及御達附候又

卷之三

以示及卽委置侯二虎約

「第三章 新約 第一節 一ノ條 新約 其實 於此 兩國  
盟國間ニ現存スル」ノ下「及ヒ之ニ附屬スル一切ノ諸  
約定」ノ上ニ露國ニ對スル分ニハ「安政元年十二月二  
十一日卽露曆千八百五十五年一月二十六日締修好條

ノ時調印セシ條約ニ修正ヲ加ヘタルモノ）和文茲ニ及御送  
付候  
前便送附ノ右約案佛文ハ取急キ謄寫爲致候ヲ以テ第十八條

締結ノ修好通商條約慶應三年十一月二十八日卽露曆千八百六十七年十二月十一日締結ノ新定約書ノ文字ヲ記入シ又瑞典諸威國ニ對スル分ニハ「明治元年九月二十七日于八百六十八年十一月十一日締結ノ修好通商及

「新約案和英文」見管ラス「別紙乙號約案」ハ省略ス  
〔第三信〕ハ省略セリ

第二十一條トシテ新案第十九條（擬准交換ニ關スルケ

條) 全文

尤前記第四信中ニモ申遣置候通常國政府ノ冀望ニテハ右乙  
號約案ヨリモ可成ハ新案ニ因リテ訂約致度ト存候間愈々  
其地ニテ開談ノ事ニ相成候場合ニハ露國政府ヲシテ新約案  
ニ因リテ開談スルコトヲ肯諾セシムル様閣下ニ於テ充分御

盡力相成庶右更二預メ申進置候

附屬書

明治二十二年八月八日調印ノ大限條約ニ對スル修正案

日本國皇帝陛下及露西亞國皇帝陛下ハ兩國臣民ノ交際ヲ皇  
長會進ノルニ同國間ニ平正ヘ所、寛宜フ准許クノ

トヲ欲シ而シテ此目的ヲ達センニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト相互

ニ日本國皇帝陛下ハ又露西亞國皇帝陛下ハ各其全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其良好妥當

兩締盟國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ居住スルモノハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及ヒ軍事上ノ賦斂或ヒ損資ヲ免カルヘン

## 第二條

露西亞國ニ在ル日本國臣民并ニ日本國ニ在ル露西亞國臣民ハ兩國ノ法律カ他ノ外國ノ臣民或ヒ人民ニ許ス限りハ現行ノ規則并手續ヲ遵守スルニ於テハ兩國ノ版圖内ニ於テ各種ノ財產ヲ獲得シ所有シ貸借シ及移轉スルコトニ關シ完全ノ自由ヲ有スヘシ

右兩國臣民ハ他ノ外國臣民或ヒ人民ニ對シ現ニ設ケラレ又ハ將來設ケラル、コトアルヘキモノト同一ノ條件ニ從ヒ且ツ内國臣民ニ對シ現ニ賦課セラレ又ハ將來賦課セラルヘキモノト異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ租稅若クハ諸賦課金ヲ徵收セラル、コトナクシテ賣買、贈遺、交換、婚姻、遺囑及其他ノ方法ニ因リ前項財產ヲ獲得シ及受授シ若クハ國外ニ其資本金ヲ全ク移轉スルコトヲ得又兩締盟國ノ臣民ハ自由ニ其財產ノ賣却所得金ヲ輸出スルヲ得ヘシ但シ如此場合ニ

於テ内國臣民カ納ムヘキ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ外國人タル爲メ輸出稅トシテ拂ハシメラル、コトナキモノトス

## 第三條

兩締盟國ノ間ニハ充分ナル通商及ヒ航海ノ自由アルヘシ該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及ヒ諸河ニシテ外國通商ノ爲メ現ニ開カレ又ハ將來開カルヘキ場所ヘ船舶及ヒ貨物ヲ以テ自在ニ到ルヲ得且通商及ヒ航海ノ事項ニ關シテハ政府、官吏、一己人或ヒ會社等ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其利益ノ爲メニ課セラル、所ノ租稅或ヒ取立金ハ其性質若クハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ拂フ所ニ異ナルカ或

ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス  
但本條及第一條ノ條款ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ現ニ行ハレ且一般ニ外國人ニ適用スヘキ商業、工業及警察ニ關スル特別ナル法律勅令及規則ノ効力ヲ毫モ害スルコトナキ旨ヲ約定ス

## 第四條（新案第三條）

兩締盟國ノ一方ノ臣民他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居若クハ商業ノ爲メニ供スル家宅、倉庫及ヒ店舗ハ侵スヘカラス右家宅、店舗ヘハ猥リニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ヒ簿記帳ヲ検査點閱スヘカラス但シ内國臣民ニ對シ法律、勅令及ヒ規則ヲ以テ制定セル條件及ヒ定式ニ據ルトキハ此限ニ在ラス

## 第五條

露西亞國ニ在ル日本國臣民及ヒ日本國ニ在ル露西亞國臣民ハ商品標或ヒ荷包標及ヒ製造標或ヒ商標ニ關シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ享有スヘシ

## 第六條

露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ヒ製造ニ係ル物品ヲ何

レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ヒ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生產或ヒ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラル、コトナカルヘシ又締盟國ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生產或ヒ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ノ生產或ヒ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入スルコトヲモ禁止スルコトナカルヘシ但此末段ノ條款ハ人民、畜類或ヒ農業ニ有用ナル草木ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及ヒ其他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

## 第七條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ一切ノ物品ヲ輸出スルニハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シテ賦課シ又ハ賦課スルコトアルヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

## 第八條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内地通關稅ノ免除、庫入、特別保護及ヒ稅金拂戻等ノ諸事項ニ就キ從來最惠國ヘ許與シ或ハ將來最惠國ヘ許與スルコトアルヘキ一切ノ利益ヲ享有スヘシ

## 第九條

内國或ハ外國ノ臣民若クハ人民カ法律上兩締盟國ノ何レカノ版圖内ヘ輸入スルヲ得或ハ輸入スルヲ得ルコトアルヘキ一切ノ物品ヲ輸入スルニハ其日本國船ヲ以テスルト露西亞國船ヲ以テスルト論セス總テ同一ノ關稅ヲ納ムヘシ又内國或ハ外國ノ臣民若クハ人民カ法律上兩締盟國ノ何レカノ版圖内ヨリ輸出スルヲ得或ハ輸出スルヲ得ルコトアルヘキ一切ノ物品ヲ輸出スルニハ其日本國船ヲ以テスルト露西亞國船ヲ以テスルト論セス總テ同一ノ關稅ヲ納ムヘシ

## 第十條

兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス日本國及セ露西亞國ノ法律ニ從セ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ露西亞國ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ此事項ニ關シテハ右法律ニ因テ他ノ外國臣助ノ處分ハ露西亞國法律ニ從ヒ之ヲ爲ズヘシ

ニ在レ所ノ總領事、領事、副領事又ハ領事代理ヘ其旨ヲ通知スヘシ若シ該地方ニ領事官ナキトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ領事代理ヘ通知スヘシ

日本帝國版圖内ノ海上ニ難破シ若クハ海岸ニ乘上ケタル露西亞國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ日本國法律ニ從テ之ヲ爲スヘク又互相ノ主義ニ基キ露西亞國版圖内ノ海上ニテ難破シ若クハ海岸ニ乗上ケタル日本國船舶ニ關スル救助ノ處分ハ露西亞國法律ニ從ヒ之ヲ爲ズヘシ

右遭難ノ船舶并ニ其器具及ヒ其他一切ノ附屬品及ヒ該船舶ヨリ救上ケタル貨物并ニ商品及ヒ右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ或ハ之ヲ賣却セル賣得金并ニ該遭難

船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ領事代理ヨリ請求スレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官持主或ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費并ニ難破救助費及ヒ其他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノトス難破船ヨリ救上ケタル貨物及ヒ商品ハ消費ノ爲メニ之ヲ賣

民或ハ人民ニ許與セラレ又ハ許與セラル、コトアルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス

露西亞國ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及ヒ日本國ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ仕向港ノ一ニ於テ其積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其最初ニ積載シタル貨物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ外國貿易ヲ許サレタル他ノ一港若クハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但常ニ兩國ノ法律及ヒ稅關規則ニ從フヘキモノトス

## 第十一條

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ無據他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ稅金ノ外一切ノ稅金ヲ拂フコトナク其港ニ於テ更ニ艤装ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但商船ノ船長ニシテ其費用ヲ辨償スル爲メ其積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其寄港地ノ規則及ヒ稅目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗リ上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ該地方權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此規則ハ持主、船長若クハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若クハ領事代理ハ其自國臣民ニ必要ノ扶助ヲ與フル爲メ職權上ノ扶助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此規則ハ持主、船長若クハ持主代理人現ニ其場ニ在ル時ト雖モ右様ノ扶助ヲ與フルヲ要スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

## 第十二條

兩締盟國ノ一方ノ國旗ヲ掲ケテ航海スル船舶ニシテ其國ノ法律ニ從テ所有セラレ帳簿ニ登録セラレ且當該官廳ヨリ正當ノ手續ヲ經テ下付セラレタル證書及ヒ免狀ヲ所有スルモノハ互ニ日本國船舶或ハ露西亞國船舶ト看認ムヘン

## 第十三條

若シ締盟國ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ逃亡スルモノアルニ際シ右船舶所屬國ノ領事又ハ其代理官ヨリ其逮捕引渡ノ事ヲ地方官ヘ依頼スルトキハ該地方官ハ其權力ノ及フ限り該逃亡人ヲ逮捕シ且之ヲ

引渡ス爲メ助効ヲ爲スヲ要スルモノトス

此條款ハ右海員ノ逃亡シタル國ノ臣民ナルトキハ適用スヘ  
カラサルモノトス

#### 第十四條

露西亞國ノ海港ニ於ケル日本國船舶及ヒ其貨物并ニ日本國

ニ於ケル露西亞國船舶及ヒ其貨物ハ其船舶カ直接ニ本國ヨリ到着シタルト他國ヨリ到着シタルトヲ問ハス又其貨物ノ積出地及ヒ到着地ノ如何ヲ問ハス各般ノ事項ニ於テ内國船舶及ヒ其貨物ト同様ノ待遇ヲ受クヘシ

内國船舶ニ對シテモ同様ニ且同一ノ條件ニ於テ賦課スルモ

ノニアラサレハ如何ナル名稱ヲ以テスルヲ論セス又船體、國旗若クハ貨物ノ何レニ基クトヲ問ハス且政府、官吏、一己人或ハ會社等ノ名義ヲ以テスルト又ハ其利益ノ爲ミニスルトヲ問ハス其到着ノ時、碇泊中又ハ出港ノ時兩國ノ一方

ノ海港ニ於テ他ノ一方ノ船舶ニ何等ノ稅金及ヒ賦課金ヲモ

徵收スルコトナカルヘシ

#### 第十五條（新案第九條）

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又ハ貨物ノ船積、船却ニ關ス

除ヲ享有スヘキモノトス

#### 第十八條

兩締盟國ノ意思ハ通商、并ニ航海ニ關スル各般ノ事項ニ付露西亞國ニ在ル日本國臣民并ニ日本國ニ在ル露西亞國臣民ヲシテ最惠國ノ取扱ヲ享ケンシメントベルニ在ルヲ以テ通商、及ヒ航海ニ關スル一切ノ事項ニ於テ現時或ハ將來其一方ヨリ別國ノ政府臣民或ハ人民ニ許與スル所ノ一切ノ特權、殊遇若クハ免除ハ他ノ一方ノ政府或ハ臣民ニモ即時ニ且條件ヲ附セシムテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

#### 第十九條

（新案第十七條全文）

#### 第二十條

（新案第十八條全文）

#### 第二十一條

（新案第十九條全文）

右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本條約佛文二通ニ記名調印スルモノナリ

明治 年 月 日即チ露曆千八百 年 月

日ニ於テ書ス

陸奥外務大臣時代 對露交渉 三三九 三四〇

ル一切ノ事項ニ就キテハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ均等ノ處置ヲ施スニアルモノトス

#### 第十六條

本條約ノ約款ハ適當ニ露國商船ト稱スヘキ船舶ト「フキンランド」大公國ノ諸港ニ於テ登記シタル船舶トニ論ナク露國ノ國旗ヲ翻ヘシテ航海スル所ノ一切ノ船舶ニ適用セラルヘシ

#### 第十七條

兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及ヒ其他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ其在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ從來許與セラレ或ハ將來許與セラルヘコトアルベキ一切ノ職務ヲ執行スルコトヲ得且一切ノ特權及ヒ免シ

明治二七年六月十五日

陸奥外務大臣ヨリ  
西駐露公使宛（往電）

交渉開談方ニ關スル件

No. 199. Regarding treaty revision Russia was disinclined to lead other powers in negotiations as stated in confidential No. 6 dated 23rd February. I told Hitrowo on June 14th that as negotiation with certain Power has now reached stage of almost certain conclusion and as I did not believe Russia meant to wait until conclusion of all other treaties, would it not be now opportune for Russian Government to begin negotiations. Hitrowo said he will recommend it to his Government as his own view, because I preferred that my name be not used in making approach. Bear in mind the above and sound views of Russian Government on favorable opportunity quickly.

Tokio, June 15, 1894. Mutsu

明治二七年六月十五日 西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛

第七號

八月十四日到

五四七

條約改正事件ニ付本月十六日電信ヲ以テ御申越ノ趣ハ度々  
問合セ候ヘ共嘗國外務省ニ於テハ今猶前ニ機密第五號ヲ以  
テ申進置候通リノ決着ニテ我ノ他國ト談判ノ終ルヲ待ツ事  
ニイタシ居ル趣ニテ有之就テハ近々自ラ右談判ニ取掛ル運  
ヒニモ至ルヘシト存シテ別ニ電報モ差出サス候右申進置候

トアルヲ

ト改メ又

明治二十七年六月二十九日

本條約ハ調印ノ日ヨリ少クモ〇〇〇ノ後迄ハ實施セラ  
レサルモノトス

トアルヲ

特命全權公使 西 德二郎

外務大臣 陸 奥 宗 光殿

陸奥外務大臣ヨリ  
西駐露公使宛

ト改メ又

尤此通知ハ調印ノ日ヨリ〇〇〇ヲ經タル後何時ニテモ  
爲スコトヲ得ヘシ

### 條約案訂正方ノ件

條約改正ニ關スル件（第六）

英國ニ對スル條約改正談判ハ彌ヨ結了シ本月十六日新約調  
印相濟候ニ付テハ同日ヨリ五ヶ年目即チ明治三十二年（千  
八百九十九年）七月十七日ヨリ實施セラルヘキ筈ニ有之然  
ルニ帝國政府今回ノ提議タルヤ各國同時ニ新約實施ノ運ニ  
相成候目的ニ有之候ニ就テハ過般及御送附置候露國及瑞典  
諸威國政府へ提出スヘキ條約案第十八條中

ト改メ置カレ度而シテ詰リ前記明治三十二年七月十七日ヨ  
リ新約ノ實施セラルヘキコトヲ標準トシテ新約調印ノ日ニ  
應シ右二ヶ處ノ空所ニ年月數ヲ書入ル、コトト致度假令ハ  
露國トノ條約明年一月調印ノ運ニ至リタリトスルカ其節ハ  
本條約ハ調印ノ日ヨリ少クモ四ヶ年ノ後迄ハ實施セラ  
レサルモノトス

尤此通知ハ調印ノ日ヨリ三ヶ年ヲ經タル後何時ニテモ  
爲スコトヲ得ヘシ

ト取極置ギ同條ニ規定ノ條約實施ニ關スル通知ヲ明三十二  
年七月十六日ニ先タツコト一ヶ年ニシテ之ヲ爲スコトト致  
候ヘハ恰モ我目的通り右明治三十二年七月十六日ヨリ實施  
スルコトヲ得ル都合ニ可相成候

右申進置候 敬具

三四一 明治二十七年六月二十三日 陸奥外務大臣ヨリ  
西駐露公使宛（往電）

### 開談委任ノ件

No. 569. (1) You are hereby authorized to open  
negotiations officially with Russian Government on  
treaty revision on the basis of new draft.

August 13, 1894. Mutsu

本月十三日第一號電信ヲ以テ御委任相成候條約改正談判ノ  
儀ハ直ニ此方ノ外務省へ申入レ尤日英新條約ノ寫モ其頃青

目下休暇時節ナレハ急ニ運フモ覺束ナク存候ヘ共成ル丈ケ  
早ク捌ケル様ニ盡力イタシ居候條此段申進置候 敬具

第十二號

十月十八日到

### 交渉開始ノ件

西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛

三四二 明治二十七年八月二十一日

明治二十七年八月三十一日

特命全權公使 西 德一郎

外務大臣 陸 奥 宗 光殿

三回目 明治二十七年十月三十一日 西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛

## 露國大藏省ノ稅則ニ關スル意嚮ノ件

第十七號

十一月十四日到

其後此地ニ於ケル條約改正事件ノ成行ハ此間右關係諸省ノ調査埠明カスシテ過去リンモ漸ク一周間前其返答外務省ヘ集リ又其頃アジャ局長ニモ歸府ニ付直ニ開談ヲ促シ候處同局長ノ說ニ他省ヘ別ニ故障ナクモ大藏省ニ於テ既結ノ舊約ニ依リ度所望ヲ申出タルニ由リ今一往該省ト掛合ハサルヲ得ス就テハ近日此方ニ於テ兩省ノ相談會ヲ催フス積リナルニヨリ其上ニテ何分ノ返答イタズベシトノ事ニテ有之候右大藏省ノ所望ハ他日シベリヤ鐵道成就シタル時ニ當國ヨリ種々ノ輸入品アルベキヲ見込ミ舊約ニ基テ全部ノ稅則ヲ條約ニ加附スルノ趣意タルベ前ニ第十一號電信ヲ以テ申進置候通り捕官ニモ早ク既ニ聞キ居候付同局長ヘ條約ノ文面ハ

右申進置候也 敬具

明治二十七年十月三十一日

特命全權公使 西 德一郎

陸奥外務大臣殿

註 西公使來電第十一號見當ラバ

三回目 明治二十九年十一月用日 西駐露公使ヨリ  
陸奥外務大臣宛(來電)

## 露國側ノ修正要求個條ノ件

29. At last I have received official answer from Russian Government regarding treaty revision. They are ready to enter (into ?) negotiations on the new basis with the following amendments:  
First, to insert in paragraph first, Article I of

draft of treaty, "conforming to the laws of the country."

Secondly, to use in Article VI the phrase "the most favored nation" instead of "native subjects" just as paragraph first, Article VIII of draft (of) 1889.

Thirdly, to add in Article X a clause similar to the last paragraph of article eleventh of English treaty.

Fourthly, to secure for Russian subject the same right as in English treaty in respect to the existing lease in perpetuity in the foreign settlement.

Fifthly, to put in the stipulations protecting privileges specially accorded to Russian subjects contained in separate articles annexed to draft of 1889.

Sixthly, in expectation of increasing trade after the complete establishment of Siberian railway, Russian Government desire now to have separate conventional tariff with us and to put in the protocol regulations similar to those contained in English protocol, A) regarding substitution of

specific duty to the ad valorem while specially to Russian Kerosene oil volume unit would be adopted, B) paragraphs third and fifth of Article I regarding respectively to articles not enumerated in the tariff and the effect of old treaty and conventions, C) Article II as to passport system.

Seventhly, before abolition of consular jurisdiction with Russia as to protection of industrial property.

Difficulty of negotiation appears to be as to tariff. The details which (?) will follow, together with my opinion for your instructions (information?).

■ volume unit ↗ 計算単位 ピュードル ヤクダラシ等

× 諸表十三

30. Russian Government proposed the following 34 different kinds of articles and rates of duty for conventional tariff based on tariff of 1867 and 1889:

Free of duty for grains, flour, beans, peas &c., seeds, for oil, oil cake, living animals, fish, meat, salt, rosin and tar; ad valorem 5 per cent for butter, condensed milk, bones and horns, wools, bristles and hairs of

兎モ角モ強テ争フ所ニ非ルモ新提出案ノ基礎タル稅則ノ論ニ至テハ舊約加附ノモノニ依テ談スルヲ得サル譯ヲ反覆辯シ置又大藏省ヘモ内々右ノ趣ヲ申入置候付向後猶之ヲ維持スベシトモ思ヘンス候ヘ共其決答ヲ得サル間ハ何トモ<sup>(ト)</sup>シヒ難シ然シ茂早遠カラサル内ニ開談ノ運ヒニ至ルシト待居ル所ニ候

camel and horse, down, feathers, skins undressed, skins of sheep, goats etc., timbers and sleepers, flax, hemp, tow, kerosene, machine oil; 8 per cent for yarns and threads of flax and hemp; 10 per cent for leathers, sole and other kinds dressed skins of sheep and others, candles, spirits; 15 per cent for skins, furs of seal, beaver and similar animals; 70 sen per 100 catties for cordage and ropes; 75 sen for sugar un-refined; 1 yen for refined sugar; 2 yen for leaf tobacco; 25 sen per 100 (10) yards for canvas and ducks; 40 sen per 1000 pieces for cigarettes.

Notwithstanding my repeated objections previously made of bringing about unusual claim on the side of Russian Government, they appear to be strongly attached to their own proposal stating the difference of their interests from those of England and the United States. Considering, therefore, difficulty to turn their mind completely to adopt our proposal<sup>1</sup>, may I insist that we could not concede as to articles already agreed upon with England and United States but concerning to (?) the other I may be able to make concessions to the limit of duties mentioned

and Italy waived conventional tariff I trust you will endeavour to induce Russian Government to do the same.

Sent from Hiroshima Dec. 10, 1894

No. 1147. 60. In continuation of my last telegram concerning treaty revision I will say that, excluding kerosene which is an article of prime necessity, the average annual value for 1891, 1892, 1893 of all articles enumerated in your telegram 30 imported from Russia amounted to less than yen 32,000 while the total average imports for the same period of the same articles from all other countries amounted to over yen 15,000,000. These figures show that the concession in favor of Russia would be of little importance but they also show that Japan must constantly keep in mind her negotiations with other Powers. The acceptance of sixth amendment would be a virtual abandonment of the idea of any statutory tariff since it would destroy the basis upon which Japan's present tariff proposals rest and would open the door for similar demands from the other Powers. The present conventional tariff project was un-

in draft of 1889. Await your instructions and in that case inform me necessary particulars of United States tariff.

Petersburg, Dec. 5, 1894. Nissi

十一月 聖彼得堡 外交大臣 謹啟  
英國、米國、法國、德國、西歐諸公使宛(社電)

Regarding your telegram 29, among Russian proposed amendments first, second, third, fourth and seventh are unobjectionable, fifth might be accepted provided the clause in the separate articles which is favourable to Japan is also maintained. As to your telegram 30 I regret to say that Russian demand for conventional tariff is inadmissible for the reason that the principle which we proposed and which was accepted by Great Britain and other Powers for conventional schedule applied only to articles the importation of which exceeded in value yen 50,000 per annum exclusive also of all those articles which from their nature do not require or are not entitled to protection against high duties. Since United States

accompanied by any demand for reciprocal tariff concessions, but if it is found essential to largely amplify that project, Japan will feel perfectly justified in asking in return for such amplification, some direct tariff concessions in favor of her staple exports. The Japanese Government have no doubt that the completion of the Siberian Railway will witness a marked expansion of trade between the two countries, but it is impossible at this time to indicate with precision the direction in which that expansion will take place. Any tariff, therefore, framed in anticipation would certainly in many respects prove irresponsible to the new conditions. The Japanese Government accordingly think the wiser course would be to await future developments before attempting to meet the new conditions. The Japanese Government earnestly hope Russia will waive any conventional tariff, but if Russia does not see her way to do so, then the Japanese Government will consent to the insertion of the new clause which appears in the Protocol with Italy without the diplomatic notes.

Sent Dec. 15, 1894. Mutsu

三月十日 丙午年十二月廿四日 西駐露公使宛(來電)  
西駐露公使(往電)

艦隊轉移ノ件

No. 1182. 67. The words "for residential and commercial purposes" in Article II, Paragraph 2 of draft treaty refer to the word "leased land" only and do not refer to "houses and warehouses" and therefore you are instructed to correct the Japanese text of that part, comparing the Japanese text of new Anglo-Japanese treaty. Inform this to Japanese Ministers in Germany, France, Holland and United States. For Japanese Minister in United States add this instruction is for the proposed new treaty with Peru.

Sent Dec. 30, 1894. Mutsu

三月八日 丙午年十二月廿四日 西駐露公使(往電)  
西駐露公使(回電)

艦隊轉移ノ件

6. Russian Government wish to know whether they

for the Japanese Government to give any direct positive assurance in reply to your telegram 6, but as the result of consultation with Minister of Finance you can say that all tariff projects hitherto prepared contemplated making measure of volume and not weight of kerosene oil dutiable unit and that the Japanese Government have no reason or desire to make any change. We are anxious to push on negotiations to conclusion as rapidly as possible and trust this telegram will remove last obstacle.

Feb. 23, 1895. Mutsu.

三月〇日 丙午年二月廿四日 西駐露公使(往電)  
西駐露公使(來電)

軍械及魚類無税輸入ノ件

大體轉換問題ノ件

15. I have just received second note of Russian Government concerning treaty revision to the effect that they will waive conventional tariff with the present (?) condition of making the same arrangement as that appears in the Protocol with Italy regard-

may expect that at the time of substitution of specific duty to ad valorem duty Russian kerosene oil would be taxed according to its measure of volume but not by weight. If so there is much hope that progress of treaty negotiation will be facilitated.

Petersburg, Feb. 13, 1895.

11. Regarding my telegram 6 the wish of Russian Government owes to the fact that Russian kerosene oil is comparatively heavier than others. I am confidently informed that if we concur with their desire there would be no further impediment on the negotiations for treaty revision. I await your answer as soon as possible and if the demand is inconvenient for us, supply me with the reason. We will see effect thereon.

Petersburg, Feb. 23, 1895. Nissi.

三月九日 丙午年二月廿五日 西駐露公使(回電)

軍械無税ノ件

No. 77. (82). Owing to fact that Diet will have voice in enactment of new statutory tariff, impossible

ing substitution, conventional tariff and also of changing diplomatic note which you denied in your telegram 60. Besides, pointing out the importance of fishery on Maritime Province and Saghalien and of keeping in future their immunity in accordance with Russo-Japanese Convention of 1867, they demand that at the time of signature of new treaty our Plenipotentiary will (assure?) them free importation of salt (salted?) and dried fish to Japan by such note as once given by Count Okuma to Russian Minister in Japan. See confidential letter dated Foreign Office August 19 (8), 22nd year of Meiji. (1889). I ask for immediate instructions on those points as it would be my last answer to make by letter and thereafter we have to settle merely formal matters on treaty revision.

Petersburg, March 14, 1895. Nissi.

三月一日 丙午年二月廿五日 西駐露公使(往電)

軍械及魚類無税輸入ノ件

The following is in reply to your telegram No. 15. Japanese Government consent to exchange diplomatic notes denied in my telegram No. 60. Japanese Government on constitutional grounds find it impossible at this time to renew Count Okuma's note of August 19, 1889, regarding duty free importation of salted and dried fish. Japanese Government are, however, very anxious to conclude treaty with Russia just at this time. The effect would be very good. Accordingly in order to secure early conclusion of treaty, Japanese Government would consent to conclude fisheries convention in Tokio in which duty-free importation of salted and dried fish could be provided for. Japanese Government would of course wish to make convention reciprocal. I hope you will use your best efforts to secure early adjustment and conclusion of treaty.

Shimmonoseki, March 27, 1895. Mutsu

三月廿一 日 西駐露公使ニテ  
陸奥外務大臣宛(來電)

右済税及漁業協定締結ノ事ハ總務ノ事

42. On my suggestion of present good opportunity for conclusion of treaty revision, I have just received note of Russian Government stating to the effect that although they recognized our declaration with regard to kerosene they desire on account of great interest taken by them with its exportation that we will insert in protocol or communicate by diplomatic note the following declaration that Japanese Government are not intending to introduce a system of taxation on kerosene by weight and that as to salted fish they accept our proposal to have fisheries convention in reciprocal principle but they wish to conclude it here at the same time with conclusion of treaty. If we have no objection to the above Russian Government are ready soon to put an end to conclusion of new treaty. I wait for early instructions.

May 11, 1895, Nissi.

三月廿一日 西駐露公使ニテ  
陸奥外務大臣宛(往電)

右済税及漁業協定締結ノ事ハ總務ノ事  
付託令ノ事

No. 169. 97. Received your telegram 42. For reasons already explained and also to avoid creating possible dissatisfaction in United States, Japanese Government desire that declaration regarding kerosene may be embodied in confidential diplomatic note. Japanese Government consent to conclude fisheries convention in Petersburg instead of Tokio. Owing to necessity of employing mail for transmission of text of draft of Fisheries Convention some time must elapse before it will be possible to conclude such convention. Simultaneous conclusion therefore of Treaty and Convention would mean considerable postponement in signature of Treaty. As Japanese Government are anxious to conclude Treaty without further delay they hope Russian Government will accept assurance which you are authorized to give that Japanese Government will at once enter upon negotiations for conclusion of Fisheries Convention or clause might be introduced into the Protocol to the effect that the two Government engage to at once enter upon negotiations for conclusion of Fisheries Convention. If these proposals furnish satisfactory solution and no

other amendments are asked by Russians Government you are authorized to sign the Treaty.

Sent May 15, 1895. Mutsu.

三月廿一日 西駐露公使ニテ  
陸奥外務大臣宛(來電)

右済税及漁業協定締結ノ事ハ總務ノ事

46. Expecting on the one hand satisfactory answer will come from Minister of Finance as to our proposal mentioned in your telegram 97, Russian Minister of Foreign Affairs entered with me into reduction of phrases in the final treaty. He proposed that in French text, to make clear (the purport?) to keep in force the Convention of Saghalien, he wishes to insert Article 17 after the words the High Contracting Parties phrase in the following sense, "Except the Convention concluded (on) May 7 1875 with supplementary article of August 22, 1875" and to strike out "et" after the said words making the rest separate clause.

Petersburg, May 22, 1895. Nissi.

三五五 明治二十八年五月二十七日 陸奥外務大臣ヨリ

西駐露公使宛(回電)

## 訂正承諾ノ件

Japanese Government accept amendment contained  
in your telegram 46.

Sent May 27, 1895. Mutsu.

No. 205. 104. Japanese Government highly appreciate  
conclusion of new treaty. Accept hearty congratula-  
tions on your success.

Sent June 11, 1895. Saionji

## 新條約締結ノ件

三五六 明治二十八年六月八日 西園寺外務大臣代理宛(來電)

## 新條約調印済ノ件

50. With my hearty congratulations for the success  
of our Government, I have the pleasure to report you  
that new treaty has been signed June 8. Exchange  
of ratifications is to take place in Tokio as soon as  
possible within six months. Treaty and other papers  
will be sent June 13 per mail San Francisco.  
Petersburg, June 8, 1895. Nissi

三五七 明治二十八年六月十一日 西園寺外務大臣代理ヨリ  
西駐露公使宛(往電)

## 表祝ノ件

外務大臣代理 西園寺公望殿

謹 1 三五六

2「別紙目録」及目録ノ書類見當ラサルモ附屬書参照

## 附屬書(1)

明治二十八年六月八日調印 日露通商航海條約

(譯文)

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ兩國臣民ノ交際ヲ  
皇張増進シ以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持セム  
コトヲ欲シ而シテ此ノ目的ヲ達セムニハ從來兩國間ニ存在  
スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト  
相互ノ利益ヲ基礎トシ其ノ改正ヲ完了スルコトニ決定シ之  
カ爲メニ日本國皇帝陛下ハ露國駐劄帝國特命全權公使從三位西德一郎ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ其ノ「スクレテール、  
データー」、「コンセイエー、プリヴヨー、アクチユヨル」、「  
セナートール」外務大臣「プランス、アレクシス、ロバノ  
フ、ロストウスキ」及其ノ「コンセイエー、プリヴヨー」  
大藏大臣「セルヂ、ド、ウイツテ」ヲ各其ノ全權委員ニ任  
命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥

陸奥外務大臣時代 對露交渉 三五八

第七號

七月二十一日到

兼テ拙官ヘ御委任相成居候當露國ト條約改正ノ談判モ漸ク  
結了シ本月八日ヲ以テ當國ノ全權委員外務大臣ロバノフ并  
ニ大藏大臣ウキツテ新條約ヘ記名調印イタシ候右ニ付テ  
ハ當日電信ヲ以テ申進置候通批准ノ交換ハ東京ニ於テ成ル  
ヘク早ク六ヶ月間ニ之ヲ爲スヘシトノ約定ニテ有之候今便  
本條約及議定書并ニ之ニ附帶ノ書類トモ一切取纏メ別紙目  
錄ノ通り差進候間御査收相成度(中略)

此段申進候也 敬具

明治二十八年六月十一日

特命全權公使 西德一郎印

附屬書 二十八年六月八日調印日露條約書

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國ノ  
法律ニ遵由シ何レノ所ニ到リ、旅行シ或ハ居住スルモ全ク  
隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財產ニ對シテハ完全ナル保  
護ヲ享受スヘシ  
該臣民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムカ爲メ自由ニ且容易  
ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利  
ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人、辯護人  
及代理人ヲ選擇シ且ツ使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司  
法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民ノ享有スル總  
テノ權利及特典ヲ享有スヘシ  
住居權、旅行權及各種動產ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法  
ニ因ル所ノ動產ノ相續竝ニ合法ニ得ル所ノ各種財產ヲ如何  
ニ處分スルコトニ關シ兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ  
版圖内ニ在リテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特  
典、自由及權利ヲ享有シ且ツ此等ノ事項ニ關シテハ内國若  
ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ稅金若ハ賦課金ヲ  
徵收セラル、コトナカルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由及法律、勅令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利竝ニ其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セラル、所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ將來納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租稅ヲ納メシムルヲ得ス  
兩締盟國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且ツ其ノ服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及軍事上ノ賦歟、或ハ損資ヲ免カルヘシ

## 第二條

兩締盟國ノ間ニハ相互ニ通商航海ノ自由アルヘシ  
兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ、又ハ一人ニテ之ヲ爲

シ、或ハ外國人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ爲スモ隨意タルヘク又家屋、倉庫ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ又ハ使用シ、住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得、但シ内國臣民ト同様其ノ國ノ法律、警察規則及稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外國通商ノ爲メ開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ稅金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ拂フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス  
但シ本條及前條ノ規定ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ商業、警察及公安ニ關シ現ニ行ハル、特別ノ法律、勅令及規則ニシテ外國人一般ニ適用スヘキモノニハ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシ

## 第三條

兩締盟國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居若ハ

商業ノ爲メニ供スル家宅、倉庫、店舗及之ニ屬スル構造物ハ侵スヘカラス

右家宅及構造物ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査點閱スヘカラス但シ内國臣民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

## 第四條

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ

何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入シ又日本國皇

帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生

產或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或

ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラル、コトナカルヘシ又兩締盟國

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ベ之ヨリ多額ノ稅金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

## 第五條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内地通關稅ノ免除ニ就キ又倉入、獎勵金、便益及稅金拂戻ニ就テハ最惠國ニ許與セラルヘキ總テノ利益ヲ享受スヘシ

## 第六條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦露西亞國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハトナカルヘシ但シ此ノ末段ノ取極ハ人、畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

港へ露西亞國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港へ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ露西亞國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ稅金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ稅金雜費等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締盟國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト露西亞國船舶ニ依ルトニ拘ハラス又其ノ仕向先ノ締盟國ノ一港タルト第三國ノ一港タルト問ハス締盟國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金並ニ稅金拂戻ノコトヲ以テスヘシ

### 第八條

政府、官吏、公吏、一私人、會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ頓稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他之ト同種ノ稅金ハ其ノ性質竝ニ名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場

合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締盟國ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

### 第九條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其ノ他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就テハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

### 第十條

兩締盟國ノ沿海貿易ヘ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各ノ法律、勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル露西亞國臣民又ハ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ許與セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス

ス全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一一於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若ハ數港へ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ兩國ノ法律及稅關規則ニ從フヘキモノトス

但シ日本國政府ハ本條約ノ期限間是迄ノ通り露西亞國船舶カ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スコトヲ承諾ス尤大阪、新潟及夷港ハ此ノ限ニ在ラス

### 第十一條

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ已ムヲ得ス他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ稅金ノ外何等ノ稅金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ艦裝ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ其ノ積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及稅目ヲ遵守スヘキモノトス

事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或  
ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保

存費並ニ難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノト  
ス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲メニ通關手續  
ヲ爲スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但シ消費ノ  
爲メニ賣捌ク場合ニハ普通ノ關稅ヲ納ムルヲ要スルモノト  
ス

兩締盟國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖

内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長  
若ハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事  
若ハ代辦領事ハ其ノ自國臣民ニ必要ノ輔助ヲフル爲メ職  
權上ノ助力ヲ爲スラ許サルヘキモノトス此ノ規定ハ持主、  
船長若ハ他ノ代理人現ニ其場ニ在ルトキト雖モ右様ノ輔助  
ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

#### 第十二條

本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト見做サル  
ヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト見認メ又露西亞國ノ國  
法ニ從ヒ露西亞國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ露

ヘシ但シ領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此  
ノ限ニ在ラス  
然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サ  
レハ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス  
總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ハ一切ノ職務ヲ  
執行スルコトヲ得且ツ其ノ在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ  
現ニ許與シ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特典、特權及免  
除ハ總テ之ヲ享有スヘキモノトス

#### 第十六條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定  
ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ專賣特許、商標及意匠ニ關  
シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

#### 第十七條

兩締盟國ハ左ノ取極ニ同意ス

日本國ニ在ル各外國人居留地ハ本日調印シタル通商航海條  
約實施ノ日ヨリ全ク其ノ所在ノ日本國市區ニ編入シ爾後日  
本國一般地方組織ノ一部トナルヘシ  
然ル上ハ日本國當該官吏ハ之ニ關シテ其ノ地方施政上ノ責  
務ヲ悉皆負擔スヘシ又之ト同時ニ右外國人居留地ニ屬スル

西亞國船舶ト見認ムヘシ

#### 第十三條

若締盟國ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一  
方ノ版圖内ニ於テ脫船スル者アルニ際シ右船舶所屬國ノ領  
事又ハ其ノ代理官ヨリ其ノ捕獲引渡ノコトヲ地方官ニ依頼  
スルトキハ該地方官ハ其ノ權力ノ及フ限該脫船人ヲ捕獲シ  
且ツ之ヲ引渡ス爲メ助力ヲ爲スヲ要スルモノトス

但シ海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脫船シタルトキハ此ノ  
規定ヲ適用セサルモノト知ルヘシ

#### 第十四條

兩締盟國ハ其一方ノ通商及航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠  
國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商及航海ニ關スル一  
切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、臣民或ハ人民ニ  
現ニ許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除  
ハ他ノ一方ノ政府、又ハ臣民ニモ即時ニ且ツ條件ヲ附セス  
シテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

#### 第十五條

兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及其ノ他ノ場所ニ  
總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ヲ置クコトヲ得

共有資金若ハ財產アルトキハ之ヲ右日本國官吏ヘ引渡スヘ  
キモノトス

尤前記外國人居留地ヲ日本國市區ニ編入ノ場合ニハ該居留  
地内ニテ現ニ因テ以テ財產ヲ所持スル所ノ現在永代借地券  
ハ有效ノモノト確認セラルヘシ而シテ右財產ニ對シテハ右  
借地券ニ載セタル條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セサル  
ヘシ但シ借地券中ニ領事官トアルハ總テ日本國當該官吏ヲ  
以テ之ニ代エヘキコトト知ルヘシ  
外國人居留地公共ノ目的ノ爲メニ無借料ニテ既ニ貸與シタ  
ル各地所ハ永代ニ保存セラルヘシ且ツ該地所ニシテ最初貸  
與シタルトキノ目的ニ使用セラルヘ限ハ總テノ租稅及徵收  
金ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス

#### 第十八條

本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ兩締盟國ニ現存スル安政元年十  
二月二十一日即千八百五十五年一月二十六日締結ノ通好條  
約、安政五年七月十一日即千八百五十八年八月七日締結ノ  
修好通商條約、慶應三年十一月二十八日即千八百六十七年  
十二月十一日締結ノ新定約書及之ニ附屬スル一切ノ諸約定  
ニ代ヘルヘキモノトス而シテ該條約及諸約定ハ右期日ヨリ

總テ無效ニ歸シ隨テ露西亞國力日本帝國ニ於テ執行シタル

裁判權及該權ニ屬シ又ハ其ノ一部トシテ露西亞國臣民カ享  
有セシ所ノ特典、特權及免除ハ本條約實施ノ日ヨリ別ニ通  
知ヲナサス全然消滅ニ歸シタルモノトス而シテ此等ノ裁判

管轄權ハ本條約實施後ニ於テハ日本帝國裁判所ニ於テ之ヲ  
執行スヘシ

### 第十九條

本條約ハ調印ノ日ヨリ少クモ四箇年ノ後迄ハ實施セラレサ  
ルモノトス而シテ日本國皇帝陛下ノ政府ニ於テ本條約ヲ實  
施セムト欲スル旨ヲ全露西亞國皇帝陛下ノ政府ニ通知シタ  
ル後一箇年ヲ經ルニ非サレハ實施セラレサルモノトス尤此  
ノ通知ハ調印ノ日ヨリ三箇年ヲ經タル後何時ニテモ爲スコ  
トヲ得ヘシ又本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ十二箇年間效力ヲ  
有スルモノトス

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタ  
ル後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一  
方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル  
後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘキモ  
ノトス

### 第二十條

本條約ハ兩締盟國ニ於テ之ヲ批准シ其ノ批准ハ本條約調印  
後六箇月内ニ可成速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ兩國全權委員ハ佛蘭西文條約書二通ニ記名調  
印スルモノナリ

明治二十八年六月八日即千八百九十五年五月二十七日

聖彼得斯堡ニ於テ之ヲ作ル

西 德 二 郎印

フランス、ロバノフ、ロストウスキ印

セ ル チ、ウ イ ツ テ印

註 原文ハ佛文ナリ、此ノ譯文ハ外務省出版ノ條約彙纂  
ニ據ル

### 附屬書（二）

#### 議定書

##### （譯文）

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日  
調印セシ通商航海條約ノ外ニ雙方ニ關スル特別ノ事項ヲ規  
定スルコト兩國ノ利益上便宜ナルヲ以テ雙方ノ全權委員ハ

### 左ノ約定ニ同意セリ

第一 兩締盟國ニ於テハ本日調印シタル通商航海條約批  
准交換後一箇月ノ後ハ露西亞國臣民カ日本國ニ輸入ス  
ル貨物及商品ニ關シ現日本國ニ於テ實施スル所ノ輸  
入税目ハ無效ニ歸スヘキモノタルコトニ同意ス而シテ

右税目ノ無效ニ歸シタル後ハ日本國ニ輸入スル全露西  
亞國皇帝陛下ノ領地ノ生産若ハ製造ニ係ル貨物又ハ商  
品ニ對シテハ其ノ時現ニ行ハル、所ノ日本國普通關稅

則ヲ適用スヘン但シ目下兩締盟國間ニ現存スル千八百  
五十八年ノ條約ノ有效ナル間ハ其ノ第十六條ノ規定ニ  
準據シ又右千八百五十八年ノ條約ノ無效ニ歸シタル後

ハ本日調印シタル條約第四條ノ規定ニ準據スヘキモノ  
トス然レトモ日本國政府ニ於テ純良ナラサル藥材、製

藥、食物若ハ飲料、猥亵ノ印刷物、圖畫、書籍、紙牌  
石版若ハ其ノ他ノ彫刻畫、寫眞及其ノ他總テ猥亵ノ物

品、日本帝國ノ專賣特許、商標及版權ニ關スル法律ニ違

背スル物品又ハ其ノ他衛生、公安若ハ風俗ニ關シ危害

ヲ生スヘキ物品ノ輸入ヲ制限シ若ハ禁止スルノ權利ハ  
本議定書ノ爲メ制限セラル、コトナカルヘキモノトス

右證據トシテ兩國全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナ  
リ

明治二十八年六月八日即千八百九十五年五月二十一日

十七日

聖彼得斯堡ニ於テ之ヲ作ル

西 德 二 郎印

フランス、ロバノフ、ロストウスキ印

セ ル デ ウ イ ツ テ印

### 附屬書(三)

別 約

(譯文)

#### 第一 條

瑞典諾威國及露西亞國ノ亞細亞境界ニ近接スル所ノ諸邦ト露西亞國トノ通商上ノ關係ハ國境貿易ニ係ル特別ノ規定ニシテ一般ノ外國通商ニ適用スヘキ規則トハ毫モ關係ヲ有セ

サル規定ナルニ因リ兩締盟國ハ千八百三十八年(五月廿六日)露西亞國ト瑞典諾威國トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラル、所ノ特別ナル條款及前記諸邦トノ通商ニ關スル條款ハ如何ナル場合ニ於テモ本條約ヲ以テ兩締盟國ノ間ニ約定シタル通商航海ノ關係ヲ變更スルカ爲メニ之ヲ引用スルコ

ト能ヘサルコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

又左ニ記載スル所ノ免稅、免除及特典ハ本條約ノ基礎タル

相互ノ主義ヲ害スルモノト認ムヘカラサルコトヲ約定ス

日本國ノ方ニ於テ

日本國政府カ將來保有スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

露西亞國ノ方ニ於テ

第一 露西亞國ニ於テ製造シ露西亞國臣民ニ所屬スル船舶ニ興ヘラレタル製造後三年間航海稅ノ免除

第二 無稅若ヘ過當ナラサル稅金ニテ「アルカンジエル」州ノ諸港ヘ鹽魚、乾魚及或種類ノ毛皮ヲ輸入シ且ツ右ト同様ノ取扱ニテ麥類、綱具、船索、「タール」及「ラバングジーク」ヲ輸出スルコトニ關シ該州沿岸ノ住民ニ許與シタル便宜益

第三 露西亞國ニ於テ遊船俱樂部ト稱スル各娛遊協會ニ許與シタル免除  
第四 露西亞帝國政府カ將來保有スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

### 第三 條

此ノ別約ハ本日締結シタル本條約中ニ其ノ全文ヲ記入シタ

ルト同様ノ效力ヲ有スヘシ又之ヲ批准シ其ノ批准ハ本條約ノ批准交換ト同時ニ之ヲ交換スヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年六月八日即千八百九十五年五月二十七日聖

彼得斯堡ニ於テ之ヲ作ル

西 德 二 郎印

フランス、ロバノフ、ロストウスキ印

セ ル デ ウ イ ツ テ印

### 附屬書(四)

石油課稅ニ關スル往報

(譯文)

以書翰致啓上候陳者帝國政府ニ於テハ石油ニ對シ稅ヲ課スルニ其容積ヲ以テセスシテ其重量ヲ以テ標準トスル新規ノ賦課法ヲ制定スルノ意思ナキ旨ヲ閣下ニ宣言致候様我政府ヨリ許可セラレ候依テ右ノ趣ヲ閣下ニ通知スルハ本使ノ光榮トスル所ニ有之候本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

樺太千島交換條約ノ効力ニ關スル宣言

(譯文)

本日締結ノ條約第十八條ハ千八百七十五年四月二十五日

(五月七日)日本國皇帝陛下ト全露西亞國皇帝陛下トノ間ニ締結セラレタル條約及同年八月十日(八月二十二日)東

京ニ於テ調印セラレタル附錄ニ關係ナキモノニシテ此ノ二種ハ尙依然効力ヲ有スルモノトス此ノ旨下名ニ於テ宣言ス

千八百九十五年六月八日(五月二十七日)

在聖彼得斯堡日本帝國公使館ニ於テ

外務大臣 プランス、ロバノフ、ロストウスキ閣下

敬 具

三五九 明治三十一年六月一日 西駐露公使ヨリ 西園寺外務大臣代理宛

## 日露條約改正ニ就テノ報告

附屬書一

二十七年八月十五日附露外務省亞細亞局長  
宛往翰

二 同十二月十九日附露外務大臣宛往翰

三 同二十一日附露外務大臣宛往翰

別紙第一號

別紙第二號

二十八年三月一日附露外務大臣來翰

同二十八日附露外務大臣宛往翰

三四月二十九日附露外務大臣來翰

同五月十八日附露外務大臣宛往翰

第八號

七月二十二日到

條約改正ニ付最初ヨリ此地ニ於テ談判ノ手續ヲ陳スレハ拙官ニハ陸奥大臣ヨリ昨年八月中第一號電信ヲ以テ開談ノ訓令ヲ受ケ別紙往復書中「往イ號」ノ通牒ヲ以テ公然談判ヲ始メ其後ノ成行ハ昨年第十二號及第十七號ヲ以テ申進候通りニ有之候處十二月四日ニ至リ當國外務大臣ヨリ別紙「來號」ノ通り返答シテ數ヶ條ノ修正説ヲ提出致候ニ付拙官ニハ同年第二十九號並ニ三十號ノ電信ヲ以テ其大要ヲ陸奥

大臣ニ報告シ新ニ訓令ヲ請ヒタルニ十二月十一日廣島發ノ電信並ニ第六十號ノ電報ニテ返答ヲ得タルヲ以テ別紙「往號」通リノ答辯ヲ爲セリ然ルニ約定稅目ノ事一問題トナリ此間其辯解ニ多少ノ時日費ヘタルモ本年二月中旬ニ至リ若シ我邦ニ於テ石油ニ課スルニ其斤目ヲ以テセシミテ容積ノ稅ヲ以テスルコトセハ約定稅目ノ請求ハ引取ルヘシトノ相談ニ歸シ本年第六號電信ヲ以テ其趣ヲ陸奥大臣ヘ伺ヒタルニ第八十二號ノ電答ヲ得テ右ノ難問モ決シタリ然ル處三月十三日ニ至リ當國外務大臣ヨリ「來ニ號」ノ通り答ヘ且ツ外交文書及乾鹽魚ニ關スル說ヲ提出シタルニ由リ第十號電信ヲ以テ之ヲ陸奥大臣ヘ報シタルニ同月二十七日下ノ關發ノ電訓ヲ得「往ホ號」ノ返翰ヲ贈レリ五月十一日當國ヨリ「來ヘ號」ノ書面ヲ贈リ更ニ石油及乾鹽魚ニ關スル提議ヲ復シタルニ由リ第四十二號ヲ以テ其趣ヲ本省ニ電報シタルニ第九十七號ノ返電ヲ得テ「往ト號」ノ通り當國ヘ終結ノ返答ヲ贈レリ後第十八條（舊十七條）ノ規定ニ付一疑問起リ第四十六號ヲ以テ之ヲ本省ニ電報シタルニ第九十九號ノ返電ヲ得テ其論亦決ス此ニ至リテ條約改正論全ク決シ當國ト書面ノ往復亦終ル

右ハ今回ノ談判中拙官ノ本省ト電信ノ往復並ニ當國外務省ト文書往復ノ大略ニ有之其間十數度ニ連ナリシ口上論辯ノ委細ニ至リテハ事複雜ニ涉ルノ懼アルヲ以テ之ヲ省キ候ニ付其大要ハ別紙當國トノ往復文ニテ御承知相成度候唯拙官ニハ成ル丈ヶ早ク談判ノ決着ヲ主トシ始終之ヲ急キ居候得共其聲明カサリシハ別紙往復書中「往イ號」ノ通牒ヲ以テ公然談判ヲ成リ當國ノ風習トシテ問答共ニ口上ノ論辯ニ續クニ書面ヲ以テシテ一々之ヲ慥ムル手續ノ煩雜ナルニモ由リ又此間先帝崩セラレ先外務大臣死シ朝鮮問題及日清戰爭等種々ノ出來事重ナリシハ幾分カ談判進行ノ妨ケニ相成候哉ニ覽ヘ候談判中最モ面勵ナリシハ當國ヨリ一旦提出シタル約定稅目ヲ引込マシムルニ在リテ是ニハ拙官モ一時ハ窮シ候得共彼是奔走ノ詮立チ其意遂ニ達シテ事完結スルニ至リンハ幸ニ存候尤モ當國モ此條約改正事件ニ付テハ我ニ好意ヲ表シタル事實ハ我亦之ヲ認メサルヘカラサル儀ト存候依テ調印済ミノ時之ニ關シテ内實主任ダリシア局長カブニスト氏並ニ全權委員ノ外務大臣ヘモ拙官ヨリ其謝意申陳置候

又新條約文面ノ事等ニ關シ拙官ノ此地ニ於テ專斷シタル事件ヲ左ニ條陳致候

メ候儀ニ候

一、第十七條ハ草案ノ議定書中ヨリ持込候モノ、處清書ノ際不注意ニテ「本日調印シタル」ノ文字ヲ削ルヲ忘レ之ヲ發見シタル時ハ既ニ調印ニ差迫リ居リ旁雙方全權委員ニ於テ右ハ唯文面上餘計ト云フ迄ニテ別ニ事實ニ闕スル

コトナケレハ其儘存シ置テモ差支ヘ無之トノ決着ニテ其通リニ致置候儀ニ候

一、當國ノ委員ハ批准ノ交換モ同シク當府ニ於テスルヲ可トスル說ニテ有之候得共拙官ニハ我政府ニ於テハ可成早グ交換ノ所望ナルニ由リ往復ニ時日ノ費ハサル様東京ニ於テ之ヲ交換スルコトニ致度越ヲ主張シテ其通りニ取定候就テハ當國ニ於テハ此ヨリ直チニ批准ノ用意ニ取掛リ

其出來次第ニハ之ヲ東京ヘ廻ヘシヒトロウオ公使ヘ交換

ヲ委任スルコトニ致スヘント外務大臣ヨリ約束有之候間

右批准書ノ廻送方モ左程際取ル事ハ可無之ト存候

一、佛文ヲ邦文ニ翻譯シタル書類ハ差急キ候故字句不充分

ナル處可有之モ難計候間右ハ本省ニ於テ原文御引合ノ上

御校正相成候様致度又本條約ノ佛文草案ハ僅カニ一部殊

リ居リ右ハ此方ニ於テ猶必要ニ付當館ニ留置候就テハ條

約書中修正ノ箇所ハ邦文草案ヘ朱書又ハ附箋ニ致シ差進候間條約本書ニ御引合相成候ハ、其修正ノ點一目瞭然可致コトト存候

右申進候 敬具

明治二十八年六月十一日

在露特命全權公使 西 德二郎印  
外務大臣代理候爵 西園寺公望殿

追テ本機密信附屬書類ハ別紙目錄書ノ通リニ有之候也將又當方ニ於テ議定書第三條及第四條ヲ以テ約定致候儀ハ御記憶有之度此段申添候也

註 1 旁記括弧内ノ數字ハ本書ニ於ケル文書番號ナリ

#### 第八號附屬書類目錄

(一) 新通商航海條約及同和譯文

(二) 議定書及同和譯文

(三) 法典實施ニ關スル通知書寫及同和譯文

(四) 約定稅目ニ關スル外交文書(往)寫及同和譯文

(五) 同上寫(來)及和譯文

(六) 石油ノ課稅ニ關スル機密公文寫及同和譯文

(七) 樺太千島交換條約ニ關スル宣言書及同和譯文

(八) 露國全權委員ノ委任狀(佛譯文)

(九) 露國外務省トノ往復書翰寫及同和譯文往「イ」號ヨリ往「ト」號ニ至ル各七通

右之通

#### 附屬書一

往「イ」號 譯文 二十七年八月十五日附露外務省亞細亞

局長宛往翰

第二號

以書翰致啓上候陳ハ本使ハ茲ニ添付差出候新草案(一、通

商航海條約案、二、議定書案、三、通告書、四、輸入稅目)

ヲ基礎トシテ條約ヲ改正スルコトニ付貴政府ト公然談判ヲ

開始スヘキ旨外務大臣ヨリ電訓ヲ接受致候

本使ハ右ノ趣ヲ閣下ニ御通知致候ト同時ニ輸入稅ノ事ニ關

シ重ネテ茲ニ説明ヲ爲スノ必要ヲ認メ候即我政府ハ普通稅

目ト約定稅目ノ一稅目ヲ制定シ新條約中ニハ單ニ約定稅目

ヲ掲ケ且ソ此稅目ハ我邦ヘ最モ多額ノ物品ヲ輸出スル邦國

トノ條約ニノミ記載スルコトト爲シ而シテ最惠國條款ニ基

#### 附屬書二

伯爵 カブニスト 閣下

日本特命全權公使 西 德二郎

亞細亞局長

#### 附屬書三

千八百九十四年八月十五日(露曆三日)

日本特命全權公使 西 德二郎

亞細亞局長

#### 附屬書四

來「ロ」號 譯文 二十七年十二月十九日附露國外務大臣

來翰

第四五一四號

以書簡致啓上候陳へ貴使へ八月三日（我曆十五日）付貴簡ヲ以テ露日條約ヲ改正スルコト及東京内閣ニ於テ査定セラレシ英日兩國間ニ締結セル條約ノ基礎ト爲リタル所ノ約案ニ由テ帝國政府ト新通商航海條約ヲ締結スルコトニ就キ帝國政府ニ向テ談判ヲ開始スルコトヲ貴使ニ委任スルノ訓令ヲ貴國政府ヨリ接受セラレタル旨ヲ帝國外務省ヘ御通知相成候ト共ニ右約案并ニ之ニ付屬スヘキ議定書案及公文案ヲ送致セラレ日本政府ニ於テハ現ニ日本國ニ行ハルトコロノ輸入稅目ノ代リニ二種ノ稅目即チ普通稅目ト約定稅目トヲ制定シ其約定稅目ハ之ヲ日本ニ物品ヲ輸入スルコト最モ多ギトコロノ諸國即チ英吉利北米合衆國日耳曼及佛蘭西トノ條約中ニノミ挿入セント思惟セラレ而シテ爾餘ノ諸國（露西亞モ此中ニ在リ）ノ如キハ日本政府ノ意見ニ據レハ其日本國トノ貿易僅少ナルノ故ヲ以テ日本國ト稅目上特約ヲ性定セシシテ約定稅目ノ利益ヲ最惠國ノ權理ニ由テ享有シ得ルコトトスル趣御說明相成致閱悉候

右ニ付キ本大臣ハ帝國政府ニ於テ露日條約ノ改正ニ着手セントノ日本政府ノ提議ヲ肯諾スルコトニ付何等故障無之更ニ日本國ノ利益ニ對シテ休戚ノ情淺カラサルコトヲ證表セシ得ルコトトスル

ニシテ一般ノ外國通商ニ適用スヘキ規則トハ毫モ關係ヲ有セサル條項ヲ以テ規定シタルニ由リ兩締盟國ハ千八百三十九年（我五月四日露四月二十六日）露西亞國ト瑞典及諸威港ノ三港ヲ除クノ外ノ諸港間ニ於ケル沿海航行ヲ許スノ規定ト同一ナル一項ヲ加フルコト

日本政府ノ提案中ニハ露國臣民ノ日本國ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權利ニ關シテハ何等規定スル所ナシ然ルニ英國臣民ニシテ其ノ居留地内ニ於テ現ニ永代借地券ニ由テ不動產ヲ所持シ居タルモノニハ英日條約（第十八條）ヲ以テ不動產所持ノ權ヲ認許セラレタリ啻ニ此事情アルノミナラス既ニ一千八百八十九年條約ニテ日本國ニ在ル露國臣民ニ今回英國臣民ニ許與サレタルト同一ノ特典ヲ許與シアレハ帝國政府ハ新條約ニ於テモ露國臣民ヲシテ右ノ特典ヲ保有セシムルヲ必要ト認メ候

右ノ外千八百八十九年露日條約ニ具載シタル別約三個條ヲ新條約中ニ掲記スルコトモ右同様帝國政府ノ必要トスル所ニシテ其個條ハ左ノ如シ

第一條 瑞典諸威國并ニ露國境界ニ接近スルトコロノ諸邦ト露西亞國トノ通商上ノ關係ハ國彊通商ニ係ル特別ノ條項

シカ爲メ東京内閣ノ査定セラレタル基礎ニ由テ新通商航海條約ヲ締結スルニ付テノ談判ヲ開始スルコトニ同意ヲ表スル旨ヲ貴使ニ通知スルノ光榮ヲ有シ候然レトモ帝國政府ハ日本政府ヨリ提出セラレタル草案ヲ精査スルニ該案中露西亞國ノ利益ニ充分適合セサル規定アルヲ以テ多少ノ增補變更ヲ爲スノ必要ト考定候義ニ有之候

右ノ增補變更ハ日本國ニ於ケル露西亞國ノ貿易及露西亞國臣民ノ權理ト露西亞國ニ於ケル日本國ノ貿易及日本國臣民ノ權理ト露西亞國ニ於ケル日本國ノ貿易及日本國臣民ノ權理ト露西亞國ニ於ケル日本國ノ貿易及日本國臣民ノ權理トニ關スルモノニシテ其事項ハ左ノ通ニ候

約案第一條兩締盟國臣民双方ノ版圖内何レノ處ニ到リ旅行シ或ハ住居スルモ全ク隨意タルヘキコトヲ規定スルノ項ニ千八百八十九年露日條約ノ本文中ニ挿入シアルト同一ノ制限句ヲ挿入シ右ノ自由ハ其ノ國ノ法律ヲ遵奉シテ之ヲ享有シ得ルコトヘスルコト是レ露國ニ於テハ特別ノ旅券規則アルカ故ニ有之候

約案第六條總テノ内國通過稅ヲ免除スルノ規定ヲ千八百八十九年條約第六條ノ文意ノ如クニ立案シ締盟兩國臣民ハ内國通過稅ニ關シテハ最惠國民ノ權理ノミヲ享有スルコトスルカ故ニ有之候

日本政府ノ提案中ニハ露國臣民ノ日本國ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權利ニ關シテハ何等規定スル所ナシ然ルニ英國臣民ニシテ其ノ居留地内ニ於テ現ニ永代借地券ニ由テ不動產ヲ所持シ居タルモノニハ英日條約（第十八條）ヲ以テ不動產所持ノ權ヲ認許セラレタリ啻ニ此事情アルノミナラス既ニ一千八百八十九年條約ニテ日本國ニ在ル露國臣民ニ今回英國臣民ニ許與サレタルト同一ノ特典ヲ許與シアレハ帝國政府ハ新條約ニ於テモ露國臣民ヲシテ右ノ特典ヲ保有セシムルヲ必要ト認メ候

第二條、無稅若クハ低廉ノ稅金ニテ「アルカンジエル」州ノ諸港ヘ鹽魚乾魚及或ル種類ノ毛皮ヲ輸入シ且ツ同様ノ條件ニテ穀物、船索、網具、爹兒（松脂）及「ラバンヅ」ヲ輸出スルコトニ關シ該州沿岸ノ住民ニ付與シタル相互通商ノ主義ヲ害スルモノト認ムヘカラサルコトヲ約定ス

第一、露西亞國ニ於テ築造シタル船舶ニシテ露西亞國民ニ所屬スルモノニ與ヘタル築造後三年間航海稅ヲ免力レシムルノ免稅

ル特權

第三、遊船會ト命名セラレタル娯遊ノ協會ニ付與シタル  
免除  
第四、帝國露西亞政府カ將來ニ於テ保有スルコトアルヘ  
キ各種ノ物品ニ關スル專賣權

第三條 此別約ハ本日締結シタル條約中ニ其全文ヲ記入シ  
タルト同様ノ効力ヲ有スヘシ又批准ヲ要シ而シテ此批准ハ  
同時ニ交換スヘシ

露西亞國ハ其日本國トノ貿易僅少ナルカ故ニ之ト特別ニ稅  
目ヲ協定セシシテ日本政府カ英吉利、北米合衆國、日耳曼  
及佛蘭西トノ條約中ニ插入セント豫定セラル、所ノ約定稅  
目ノ利益ヲ最惠國ノ權理ニ由テ享有スヘシトノ日本政府ノ  
提議ニ關シテハ本大臣ハ左ノ事情ヲ貴使ニ開陳スルヲ必要  
ト致候即チ目下貴國ニ於ケル我國ノ貿易タル實ニ僅少ニシ  
テ石油及少額ノ魚類、骨類、更紗、網具、船索、等ヲ輸出  
スルニ過キサレトモ西比利大鐵道貫通シ且ツ我國ト東洋ト  
ノ海路交通益々頻繁ニ赴クニ從テ該貿易發達シ日本國ハ露  
西亞產諸物品ノ一市場トナルニ至ルヘキコトヲ豫想セサル  
ヲ得サルコト是ナリ帝國政府ハ此事情ヲ考察スルヲ以テ前  
述東京内閣ノ提議ニ同意スルコト能ハス而シテ自ラ日本政

款ノ効力ニ由テ露國ニモ均霑スヘシト雖モ右ノ利益及特典ト全  
タルヤ露國ノ爲メニ收得セント欲スル所ノ利益及特典ト全  
然符合セサルトヨロアルカ故ニ有之候  
次ニ新露日條約ノ追補スヘキ議定書案ニ涉リテハ本大臣ハ  
貴使ニ通知スルニ帝國政府ニ於テハ英日議定書中ニ脫漏セ  
ル所ノ左ノ規定ヲ挿入スルヲ必要ト認メ候旨ヲ以テスルノ  
光榮ヲ有シ候

第一、從價稅ヲ一定ノ從量稅ニ變更スルノ目的ニテ通商航  
海條約調印ノ日付ヨリ六ヶ月間ニ追加條約締結ノ件但シ露  
國產石油ニ對シテ一定ノ稅率ヲ制定スル場合ニ於テハ石油  
ノ容量ヲ課稅ノ標準トセラレント冀望ス

第二、稅目ニ掲ケサル物品ニ對シテ適用スヘキ關稅則ヲ明  
示スルコト

第三、此ノ外總デノ事ニ付テハ現行條約ノ規定ハ新條約實  
施ニ至ル迄保續ノ件

第四、條約批准後ハ露西亞國民ヲシテ日本國內何レノ地ヘ  
モ到リ及住居スルコトヲ得セシムル様日本國ニ於テ旅券方  
法改定ノ件

第五、日本政府ハ日本國ニ於ケル露國領事裁判權廢止ニ先

府ニ向テ左ノ提議ヲ爲スヲ必要ト致候即チ今後日本國カ別  
國ニ許與スル所ノ一切ノ低稅ハ露西亞國ニモ即時ニ且ツ無  
條件ニテ之ヲ許與スヘントノ條件ヲ付シテ露西亞國ト特別  
ニ稅目ヲ約定セラレンコト是ナリ因テ茲ニ現ニ我國ノ輸出  
貿易上ニ關係アリ或ハ將來之ニ關係アルヘキ物品ニシテ帝  
國政府カ約定稅目中ニ具載セント欲スルモノノ目錄ヲ添付  
シ之ヲ貴使ニ送致スルノ光榮ヲ有シ候

右目錄ニ就キテ御了悉相成ヘク通リ我政府ニ於テハ同目錄  
所載ノ物品中或ルモノニ對シテハ其輸入稅率ヲ英日條約ノ  
稅目ニテ制定シタル稅率ヨリモ低減シ又英日稅目中ニ掲載  
セラレサリシ所ノ或ルモノニ對シテハ千八百六十七年十二  
月十一日（我十二月二十三日）締結條約ノ附屬稅目ニテ我  
國ニ許與セラレタル無稅輸入ノ權ヲ保持シ又他ノ或ルモノ  
ニ對シテハ千八百八十九年條約附屬稅目ニ於テ保存シタル  
千八百六十七年約定ノ稅率ヲ保續センコトヲ冀望スル儀ニ  
有之而シテ我政府カ日本國ニ於ケル露國ノ貿易ニ關シテ右  
ノ如ク其輸入上或ル特別ノ免除ヲ保持セント希望スル所以  
ノモノハ七月四日（我七月十六日）締結英日條約ニ由テ英  
國ノ貿易ニ向テ許與セラレタル所ノ利益及特典ハ最惠國條

チ工業ノ所有權ニ關シテ帝國政府ト協定スルコトヲ約スル  
コト

右ノ趣貴使ニ御通知及ヒ候條帝國日本政府ニ於テ本簡ニ列  
記シタル帝國政府ノ希望ヲ全ク公正ナルモノト認メラレ且  
ツ我政府カ日本國ノ利益ニ對シテ休戚ノ情淺カラサルコト  
ヲ確知スルノ機會ニ一度ナラス遭遇セラレタリシ所ノ東京  
内閣ニ於テ同内閣ノ査定ニ係ル露日條約案及之ニ附屬スル  
特別ノ議定書案ヲ前記希望ノ通ニ増補變更セラル、ニ付故  
障ナカランコト本大臣ノ冀望スル所ニ候 敬具

千八百九十四年十二月十九日

エヌ、ギルス 手記

日本特命全權公使 西 君

註 約定稅目中ニ掲載スヘキ物品表ハ之ヲ省略ス

### 附屬書三

往「ハ」號 譯文 二十七年十二月二十一日附露外務大臣

宛往翰

以書箇致啓上候陳ハ閣下ハ十二月一日（露曆十一月十九日）

付第四千五百十四號貴簡ヲ以テ帝國露西亞政府ニ於テハ帝國日本政府ノ日露條約改正ニ着手セントノ提議ヲ肯諾セラル、ニ就テ故障無之且ツ東京内閣ニ於テ査定シタル基礎ニ由テ新通商航海條約締結ノ談判ヲ開始スルコトニ同意ヲ表セラル、モ該内閣ノ提案ニハ多少ノ増補變更ヲ爲スヲ繫要正ノ中ニハ此件ニ關シテ本使ニ委任セラレタル全權内ニ於テ裁斷シ得ヘカラサル問題ニ涉ルノ事項モ有之候故本使ハ早速電報ヲ以テ貴簡ノ旨趣ヲ本國政府ニ通知シ訓令ヲ請ヒ置候處今ヤ其訓令ヲ接受致候儀ニ有之候

帝國日本政府ハ閣下カ貴簡中ニ列記セラレタル所ノ帝國露西亞政府ニ於テ條約案及條約ノ附錄タルヘキ議定書案ニ挿入セント冀望セラル、增補變更ニ就テハ精密周到ナル審査ヲ遂ケタル末下記ノ諸點ニ於テハ右增補變更ニ同意シ得ヘキ儀ト認定致候

(第一) 條約案第一條ニ千八百八十九年日露條約(第一條)  
ノ本文中ニ挿入シアルト同一ナル制限句ヲ挿入シ締盟兩國ノ臣民ハ双方ノ版圖内ニ於テ其國ノ法律ヲ遵奉シテ何レノ地ニ到リ旅行シ或ハ住居スルモ隨意タルヘシトスルコト

日本國ニ於テ旅券方法變更ノコトニ關シテハ本使ハ左ノ事情ヲ具陳シテ閣下ノ注意ヲ仰クノ光榮ヲ有ス即チ帝國日本政府ハ七月十六日(露曆七月四日)日英條約ノ附錄タル議定書第二款ニ基キ英國臣民ニ對シ九月二十日ヨリ該規定ニ適合スル旅券規則ヲ施行シ而シテ此旅券規則ハ已ニ十月二十日ヨリ露國臣民ニ對シテモ均シク施行相成居候事是ナリ事情如此クナルヲ以テ本使ニ於テハ最早旅券方法變更ニ關スル規定ヲ條約案中ニ挿入スル必要ナキモノ、如クニ致思考候

露西亞國ト特別ニ稅目ヲ約定セントノ帝國露西亞政府ノ提議ニ移リテ我政府ノ意見ヲ開陳セントスルニ當リ本使ハ先ツ本年八月十五日附書簡ニ具載シタル本使説明ノ遺漏ヲ補フヲ以テ緊要ト認候抑モ帝國日本政府カ約定ト普通トノ二種稅目ヲ設定スルノ方策タルヤ輸入品中輸入價格五萬圓ヨリ少カラサル物品ノミヲ約定稅目ニ編入シ爾餘ノ物品ニシテ其輸入價格前述ノ標準額ニ達セサルモノニハ普通稅目ヲ適用スルニ在リ尤モ此區別上多少ノ變例ナキニ非ラサレトモ是レ其物品ノ性質日本國經濟上特別ノ關係アルニ起因スルモノニ有之候

(第二) 條約案第六條ヲ千八百八十九年條約第八條ノ文意ノ如クニ立案シ締盟兩國ノ臣民ハ一切ノ内國通過稅ニ關シテハ最惠國民ノ權利ノミヲ享有スルコトト規定スルコト  
(第三) 條約案第十條ニ本年七月十六日(露曆七月四日)日英條約第十一條中英國ノ船舶ニ日本國ノ現開港中大阪新潟及夷港ノ三港ヲ除クノ外ノ諸港間ニ於ケル沿海航行ヲ許スコトヲ規定シタルノ項ト同一ナル一項ヲ加フルコト  
(第四) 露國臣民ニ不動產所持ノ權ヲ許スコトニ關シテ日英條約第十八條ニ於テ英國臣民ニシテ現ニ其居留地内ニ於テ永代借地券ニ由テ不動產ヲ所持シ居タル者ニハ此不動產所持ノ權ヲ認許シタルト同一ナル規定ヲ別ニ一ヶ條トシテ條約案中ニ挿入スルコト  
(第五) 千八百八十九年條約ニ掲ケタル別約三ヶ條ノ全文即チ其第二條ニ帝國日本政府カ將來ニ於テ保有スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權ニ就テノ規定ヲモ其儘保存シテ右三ヶ條ヲ殘ラス條約案中ニ掲載スルコト  
(第六) 帝國日本政府ハ日本國ニ於テ露西亞國領事裁判權ノ廢止ニ先タチ工業所有權ノ保護ニ關シ帝國露西亞政府ト協定スルコトヲ約スルノ規定ヲ議定書案中ニ挿入スルコト

右ノ基礎ニ由リ設定セントスル稅目ニ關スル帝國日本政府ノ提案ニ對シテ英吉利北米合衆國及伊太利ノ三國ハ已ニ同意ヲ表シテ條約締結ニ至リ而シテ北米合衆國ノ如キハ特別ニ稅目ヲ約定セサルコトニ同意シ(北米合衆國ヨリ日本國ニ輸入スル物品ノ中石油ノ輸入價格ハ貳百五十三萬圓ニ達シ迴カニ露西亞石油ノ輸入價格七十九萬七千圓ヲ超過セリ)伊太利モ亦タ之ニ同意シタリ尤モ同國ハ茲ニ添付スル別紙第二號ニ記載スルトコロノ條件ヲ付スルヲ必要トシタル儀ニ有之候

閣下ノ送付セラレタル所ノ帝國露西亞政府ニ於テ約定稅目中ニ編入セント冀望セラル、物品目錄ヲ精査シタル末本使ハ茲ニ左ノ事實ヲ陳述スルヲ必要ト致候即チ我政府ノ調査ニ關ル統計表ニ據ルニ該目錄ニ具載シアル所ノ露國ヨリ輸入スル物品中石油ヲ除キ爾餘ノ物品ノ最近三年間(千八百九十年、千八百九十二年及千八百九十三年)ニ於ケル平均輸入價格ハ三萬二千圓ニ達セス然ルニ同一年間ニ於テ他ノ諸國ヨリ輸入セル同一物品ノ平均輸入價格ハ壹千五百萬圓ヲ超過セルコト是レナリ此數字ハ貴政府ノ提案ニ由テ露西亞國ト特ニ稅目ヲ約定スル事タル日本國ニ取テ利害ノ關係

係大ナラサルヲ明示スルト同時ニ又帝國日本政府ニ於テハ此稅目約定ニ連帶スル重要ナル關係及之ニ由テ生スヘキ結果ヲ考察セサルヘカラサルコトヲモ明示スルトコロノモノニ有之即チ斯ノ如キ約定ヲ爲サンカ是レ今回帝國日本政府ノ提出シタル稅目案ノ基礎ヲ滅却スルニ均シキモノニシテ他ノ諸國ヨリモ最惠國ノ權利ニ由テ同一ノ要求ヲ爲スヘキ道ヲ開クト同時ニ尙ホ今ヨリ條約ヲ締結セントスル諸國ヨリ我政府ニ於テ採用シタル稅目案ノ基礎ト矛盾スル所ノ要求ヲ喚起スルニ至ルヘク候

西伯利鐵道ノ落成スルニ及ンテハ兩國間ニ於ケル貿易市場ノ著シク擴張スヘキハ帝國日本政府ノ疑ヲ容レサル所ナリ然レトモ此擴張ノ趨勢如何ハ目下ノ處未タ之ヲ確定スル能ハス而シテ如何ナル低稅目モ豫想ヲ基礎トシテ設立スルトキハ諸般ノ關係上或ハ將來ノ事體ニ適合スルコト能ハサルコトアルヘシ故ニ帝國日本政府ハ將來ノ事體果シテ豫期スルトコロト符合スヘキヤ否又貿易上ノ變化ハ如何ナル程度ニ於テ現ハルヘキカ未タ判明ナラサルノ今日ニ在テ之ニ應スルノ準備ヲ爲サンヨリハ寧ロ其事體ノ生スルヲ待ツテ却テ用意ノ一層慎密ナルモノナルヘシト致思考候帝國日本政

## 東京外務省電信課

十二月十二日東京發 西公使宛

閣下ニ密報ス十二月一日伊太利國ト新條約ヲ締結調印セリ議定書中ニ左ノ規定ヲ掲載シタリ

然レトモ本日調印シタル條約及本議定書中擔保シタル關係ニ關シ最惠國條款ノ適用後日ニ至リ實際上不滿足ト認ムル時ハ兩國政府ハ其各一方ヲ取り輸出上特別ノ關係ヲ有スル物品ニ對シ關稅ヲ約定稅目ニ改ムルコトニ付商議スヘキハ勿論ノコト、斯右規定ノ外締盟國兩國ハ右ノ文意ノ外交的公文ヲ交換シタリ

締盟兩國ノ各一方ニ取リテ輸出上關係ヲ有スル物品ニ關シ約定稅目ヲ改ムルコトニ付テノ提議ハ條約實施ノ後何時タリトモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ若シ提議ヲ爲シタル日ヨリ六ヶ月間ニ約定稅目ニ關スル約定成立セサル時ハ他ノ一方ヨリ輸入スル物品ニ對シテハ普通稅目ヲ適用シ此場合ニ於テハ最惠國主義ノ適用ハ追テ約定稅目ニ關スル約定成立スル迄之ヲ中止スヘシ

露西亞國外務大臣 ギルス閣下

特命全權公使 西 德二郎

## 別紙 第二號

## 東京外務省電信課

十一月二十四日東京發 西公使宛

閣下ニ密報ス十一月二十二日北米合衆國ト新條約ヲ締結調印セリ我請求ニ由テ合衆國ハ約定稅目ヲ締結スルコトヲ罷メタリ

露國委員ノ請求ニ由リ第三四號書簡ニ添付シテ露政府へ送付セシモノナリ

## 別紙 第一號

## 附屬書四

來ニ號譯文二十八年三月一日附露國外務大臣來翰

## 第九五二號

以書翰致啓上候陳者東京内閣ハ客年十一月十九日附第四五一四號書翰中ニ縷述致置候帝國政府ノ冀望ニ應シ義ニ帝國政府ハ差出サレタル通商航海條約案及之ニ附屬スル議定書案ヲ變更増補スルコトニ付何等故障ヲ有セラレサルモ之ト同時ニ東京内閣ハ目下露日兩國間ノ貿易額未タ僅少ナルノ故ヲ以テ帝國政府カ稅目ニ關スル特約ヲ結フコトヲ主張セシテ伊國及北米合衆國ノ例ニ從ヒ如斯キ特約ヲ爲スノ意思ヲ拋棄ゼンコトヲ冀望セラル、趣客年十二月九日附（我曆二十一日）第三四號書翰ヲ以テ御通牒相成敬悉致候前述貴翰ヲ查閱スルニ帝國日本政府カ今日ニ於テ露國ト稅目ニ關スル特約ヲ爲スノ不便ヲ感スル重ナル原因ハ未タ日本ト條約ノ調印セサル他ノ邦國ヨリ同様ノ請求ヲ爲サシムルノ端緒ヲ開キ且ツ一々如此キ請求ヲ容ル、時ハ東京内閣カ條約締結上保持セントスル仕組ヲ全破スルノ懸念アルニ由ルモノト被存候

ノ條約締結上何等困難ヲ惹起サシメサランコトヲ冀望シ日  
本ノ稅目ニ關スル特約ヲ結ハサルコトニ同意ヲ表シ候得共  
此際右締結ノ意思ヲ拠棄シタルニ就テハ伊國カ約定シタル  
モノト同一ナル條件ヲ附スルノ必要ヲ認メ候即チ條約ニ付  
屬スル議定書中ニ若シ條約及議定書中擔保シタル關稅ニ關  
スル最惠國條款ノ適用後日ニ至リ實際上不滿足ナルモノト  
認ムル場合ニハ兩國政府ハ其各一方ノ輸出上特別ノ關係ア  
ル物品ニ對スル關稅ヲ約定稅目ニ改ムルコトニ關シ特約ヲ  
爲スコトニ付テノ規定ヲ記入シ且ツ兩締盟國ノ各一方ノ輸  
出上ニ關係アル各物品ニ對シ約定稅目ヲ締結スルコトニ關  
スル提議ハ條約實施後何時タリト雖モ各別ニ申出スコトヲ  
得ヘク若シ右提議ヲ爲シタル日ヨリ六ヶ月以内ニ之ニ關ス  
ル約定成立セサルトキハ最惠國條款ノ適用ハ約定成立ノ日  
迄申止スヘキ旨記載スル公文ヲ交換スルコト

前述條件ノ外帝國政府ノ最モ必要ト相認メ候ハ石油ニ對ス  
ル日本現行ノ從價稅ヲ廢シ之ヲ從量稅ニ改ムルニ方リ重量  
ニ由ラス容積ヲ標準トシ課稅セラレンコトヲ望ムノ一事ニ  
シテ此提議ヲ爲ス所以ハ露國產石油ノ重量ハ米國產石油ヨ  
リ重キ故ニ有之（露國產石油ノ比重〇、八二五ナレトモ米

國產ハ〇、八〇〇弱ナリ）即チ重量ニ由リ課稅セラル、時  
露國產百二十一「リトル」米國產百二十五「リトル」ニ對  
シ同額ノ稅金ヲ賦課セラル、カ故米國產ノ特利ヲ占ムルコ  
ト明瞭ニ有之候  
貴使御承悉ノ通千八百八十九年七月二十七日露日條約及新  
日本稅目調印ノ際大隈伯ヨリ日本政府ハ新條約實施ノ日ヨ  
リ其施行期限中日本ヘノ輸出品中露國ノ特ニ關係ヲ有スル  
鹽魚及乾魚ニ對スル輸入稅ヲ免除スル旨公文ヲ以テ東京駐  
劄當國公使ニ通牒セラレタリ

千八百六十八年ノ露日條約ニ從ヒ鹽魚及乾魚ノ無稅輸入ニ  
關スル現在ノ免除ヲ將來ニ保存スルハ沿海州及薩哈連島ノ  
海ニ於テ漁獲スル魚類ノ販路擴張上露國ノ爲メ最モ必要ナ  
ルヲ以テ帝國政府ハ日本政府カ此冀望ヲ全ク公正ナルモノ  
ト認メラレ新條約調印ノ際魚類ノ無稅輸入ニ關シ千八百八  
十九年大隈伯ヨリ當國公使ヘ差出サレタルモノト同様ノ公  
文ヲ日本全權委員ヨリ提出セラレ度希望致候  
帝國政府ハ條約ノ施行期限ニ關シ東京内閣ヨリ提出セラレ  
タル條約案ニ豫定シタル七年ヲ改メ日英兩國間ニ締結セル  
條約ノ期限即チ十二年ト相定メ度候

前述ノ通帝國政府ノ所望ヲ貴使ニ通知スルニ方リ關稅問題  
ニ關スル露國ノ讓歩ニ對シ帝國日本政府ハ前記冀望ヲ滿足  
セシムルニ故障ナク露日條約ノ結了ヲシテ雙方ノ爲メ便宜  
ナル成功ヲ告ケシメンコト本大臣ノ冀望スル所ニ候  
右得貴意候 敬具

千八百九十五年三月一日（我曆十三日）

侯爵 ロバーノフ 手記

日本特命全權公使 西 殿

#### 附屬書五

往「ホ」號二十八年三月二十八日附露國外務大臣宛往翰

第六號

以書翰致啓上候陳者閣下ハ去歲十二月二十一日付本使書簡  
ニ對シ本年三月一日付第九百五二號貴簡ヲ以テ露西亞政府  
ニ於テハ帝國政府カ目下露西亞國ト約定稅目ヲ締結スルコ  
トヲ自己ニ取リテ不便トスル重ナル理由ヲ參酌セラレ且ツ  
右締結ニ由テ條約締結事業上ニ何等困難ヲ來サシムルカ如  
キハ敢テ希望セラレサル所ナルカ故ニ目下日本國ト約定稅  
目ヲ締結セサルコトニ同意セラルヘキモ右締結ノ事ヲ斷念

スル場合ニ方リ其課稅ノ標準ヲ石油ノ重量ニ由ラシシテ其容積ニ由テ定ムルコトヲ最モ必要トセラル、旨ヲ開陳セラレタリ

此問題ニ對シテハ帝國政府ハ目下ノ處背諾ノ意味ヲ以テ確答スルコト能ハス是レ新ニ普通稅目ヲ制定スルニハ國會ノ

協賛ヲ要スルカ故ニ有之候然レトモ今日迄準備シタルトコロノ稅目案ニ於テハ石油ニ對スル課稅ノ標準ハ石油ノ重量

ニ由ラス總テ其一定ノ容積ニ由リテ定ムルコトニ相成居候而シテ帝國政府ニ於テハ之ニ關シ何等變更ヲ加フヘキ理由ナク又之ヲ加ヘントスルノ希望ヲモ抱カサル旨宣言スヘキ

コトヲ本使ニ委任サレタル儀ニ有之候

將又比德堡内閣ニ於テハ沿海州及薩哈連島ノ海ニ於ケル漁業ノ要重ナルコトヲ認メラル、カ故ニ條約調印ノ時魚類ノ

無稅輸入ノコトニ關シテ日本國委員ヨリ千八百八十九年大隈伯カ露西亞國公使ニ交附シタルモノト同一ナル公文ヲ露

西亞政府ニ交付スルコトヲ希望セラル、趣ニ候處東京内閣ハ今日ニ在テハ復タ右ノ公文ヲ交付スルコト能ハサルノ事

情有之是ノ同内閣ノ遺憾トスルトコロナレトモ右ノ如キ處置ハ帝國憲法ニ抵觸スルヲ以テ無餘儀次第ニ候然レトモ東

右得貴意候 敬具  
千八百九十五年三月二十八日（露曆十七日）

日本特命全權公使 西  
外務大臣侯爵 ロバーノ・フロスト・スキーリ閣下

#### 附屬書六

來「ヘ」號 譯文 明治二十八年四月二十九日附露國外務大臣  
來翰

第一八五一號

以書翰致啓上候陳ハ貴使ハ去ル三月二十九日（露曆十七日）は第六號貴簡ヲ以テ日本政府ニ於テハ三月一日（我曆十三日）付本省書簡ニ叙述シタルトコロノ帝國政府カ約定稅目ヲ締結セサルニ付必要トスル條件ヲ採用セラルヘニ何等故障ヲ見サルモ日本國ニ於テ石油ニ對シ現行ノ從價稅ヲ廢シテ從量稅ヲ制定セラルルノ場合ニ方リ其課稅ノ標準ヲ石油ノ重量ニ由ラス其容積ニ由テ定メラレタシトノ帝國政府ノ希望ニ關シテハ東京内閣ハ之ヲ肯諾スルコトヲ約シ難ク然レトモ同内閣ニ於テハ石油ニ對スル課稅ノ標準ヲ石油ノ重量ニ由テ定メントスルノ希望ヲ抱カレサルコトヲ宣言スヘキ様貴使ニ委任セラレタル旨御通知相成且ツ又日本政府ニ於テハ鹽魚及乾魚ノ無稅輸入ニ關スル免除ヲ保續セシムルハ露西亞國ニ取リテ必要ナルコトヲ認メラレ此ノ件ニ關シテ帝國政府ト特別ノ條約ヲ締結スルニ付テハ異議ナク尤モ此條約ハ互相ノ基礎ニ由テ締結スルコト希望セラル、旨ヲモ併セテ御通知相成致閱悉候

右ニ就テ本大臣ハ貴使ニ通知スルニ左ノコトヲ以テスルノ光榮ヲ有シ候即チ露國產石油ノ重量ハ米國產石油ヨリ重キ

ニ由リ日本國ニ於テ石油ニ對スル課稅ノ標準ヲ石油ノ重量

ニ由ラス其ノ容積ニ由テ定ムルコトタル露國ノ貿易上極メテ重要ナル問題ニシテ此問題ノ決定ハ帝國政府ノ懸念セサルヲ得サル所ニ有之候依テ帝國政府ハ日本政府ニ於テハ石油ニ對スル課稅ノ標準ヲ石油ノ重量ニ由テ定メントスルノ意思ナシトノ同政府ノ宣言ヲ通商航海條約附屬議定書中ニ掲記スルカ若クハ同條約ニ添付スヘキ特別ノ公文中ニ具載セラレンコトヲ希望致候

次ニ鹽魚及乾魚ノ無稅輸入ニ關シテ露日兩國間ニ特別ノ條約ヲ締結セントノ日本政府ノ提議ニ就テハ帝國政府ハ互相ノ基礎ニ由リテ右條約ヲ締結スルコトニ同意ヲ表スルモ此締結ハ通商航海條約ノ締結ト同時ニ爲スヲ必要ト認メ候以上ニ叙述シタル帝國政府ノ希望ヲ貴使ニ御通知及候條若シ日本政府ニ於テ此希望ヲ充タスニ何等故障ナキニ於テハ帝國政府ハ東京内閣ノ查定セラレタル約案ヲ基礎トシ之ニ爾後談判ノ際兩國政府ノ同意シタル通ニ增補修正ヲ加ヘテ通商航海條約ヲ締結スルニ異議ナキ儀ニ有之候

右得貴意候 敬具

千八百九十五年四月二十九日（露曆）

プリンス・ロバーノ・フ 手記

## 附屬書七

往「ト」號二十八年五月十八日附露國外務大臣宛往翰

第十三號

以書簡致啓上候陳者閣下ハ去ル四月二十九日(我曆五月十一日)付貴簡ヲ以テ帝國露西亞政府ニ於テハ石油ニ對シ重量ヲ標準トシテ課稅スルノ意思ナキコトニ付テノ自本國ノ宣言ヲ議定書中ニ掲記スルカ若シクハ條約ニ添付スヘキ特別ノ公文中ニ具載センコトヲ冀望セラル、旨御通知相成候處帝國日本政府ニ於テハ右ノ如キ宣言ヲ議定書中ニ掲記シ若ハ條約ニ添付スヘキ公文中ニ具載スルコトノ不都合ナルヲ認ムルハ去ル三月二十九日(露曆三月十七日)付本使ノ書簡中ニ陳述シタル理由アルニ因ルノミナラスノ如クスル時ハ北米合衆國ヲシテ不満ヲ懷カシムル虞モ有之候間右ハ秘密公文ノ體裁ヲ以テ贈書シ貴政府ノ希望ヲ充タサントノ所望ニ有之候。

鹽魚及乾魚ノ無稅輸入ニ關シ特別ノ條約ヲ締結スルコトニ就テハ帝國日本政府ハ該條約ヲ東京ニ於テ締結セスシテ比

德堡ニ於テ締結スルコトニ同意致候へ共約案郵送スルニハ許多ノ時日ヲ要スルカ故ニ該條約ヲ通商航海條約ト同時ニ締結セントスル時ハ通商航海條約締結ノ時期自然遲延スルニ至ルベク然ルニ帝國日本政府ニ於テハ通商航海條約ハ此上猶豫スルコトナク目下直ニ之ヲ締結センコトヲ切望スル儀ニ有之候間先ツ之ニ着手シ魚類ノ無稅輸入ニ關スル條約ハ追テ締結スルコトニ致度候。

帝國日本政府ハ石油ニ對シ重量ヲ標準トシテ課稅スルノ意思ナキコトニ付テノ宣言ヲ記載スル公文ノ體裁及魚類ノ無稅輸入ニ付テノ條約ヲ締結スルノ期限ニ關スル前述ノ提議ヲ帝國露西亞政府ニ於テ採納セラレバコトヲ切望シ本使ニ委任スルニ帝國日本政府ハ魚類ノ無稅輸入ニ關スル條約ニ付テノ開談ヲ遲延セサル旨ヲ保證スヘキコトヲ以テシ若ン露西亞政府ニ於テ冀望セラル、場合ニ於テハ議定書中ニ兩國政府ハ該條約締結ニ關シ速力ニ開談スヘキコトヲ約スルトノ一條ヲ挿入スルモ無差支トノ趣申越候儀ニ有之候。

終リニ臨テ本使ハ茲ニ一言ヲ加フルノ光榮ヲ有ス若シ帝國露西亞政府ニ於テ條約改正事件ニ付今回ノ談判ニ由テ得タル所ノ結果ヲ以テ満足スルニ足ルモノトシ最早新條約ノ締

結ニ着手シ得ヘキコトニ證メラル、ニ於テハ本使ハ條約調印ノ全權ヲモ有シ居候間左様御承知相成度候

右得貴意候 敬具

千八百九十五年五月十八日(露曆六日)

日本特命全權公使 西

外務大臣侯爵

ロ バーノフ、ロストーフスキイ 閣下

六月二十二日譯了

外務大臣子爵 青木周藏閣下

三六二 明治三年六月二十日  
露國公使ヨリ  
青木外務大臣宛

條約實施上ノ疑義ニ付質問ノ件

ロ 一 ゼン

IIIKO 明治三年六月十九日 西駐露公使ヨリ  
西園寺外務大臣代理宛(來電)  
新條約批准済ノ件

55. New treaty was ratified by the Emperor of Russia June 18th. It will be sent soon by French mail. (下略) Petersburg, June 19, 1895 Nissi Rec'd June 23, 1895.

IIIK-1 明治三年五月十日 西園寺外務大臣代理ヨリ  
西駐露公使宛(往電)

批准交換済ノ件

No. 382. 138. Ratification of Russian treaty ex-

陸奥外務大臣時代 對露交渉 IIIKO IIIK-1 IIIK-1

ニ至ル諸條

等ニシテ賃貸借ノ存續期限ハ二十年ヲ超ユルコトヲ得ス（民法第六百四條）從テ製造所、銀行等ノ如キ重要ナル建物ノ建築ニ供スル土地ノ賃貸借ニハ適用スヘカラサルモノニ有之候

地上權ハ法文ニ據リ契約當事者ニ於テ其契約書中ニ無期限ノ年限ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得ルモノニ有之候（民法第二百六十八條）新條約ハ（日獨條約附屬千八百九十六年四月四日ノ議定書ヲ除ク）大概單ニ外國人ノ土地ヲ借受クルヲ得ト云フ權利ヲ規定スルノミニシテ日本ノ法律ニ規定スル所ノ二個ノ土地借受方法即チ賃貸借契約又ハ地上權契約ヲ示定スルコト無之候

住居、工業、商業用ノ建物建築ノ爲メ日本國ニ於テ土地ヲ借受タルノ權利ヲ外國人ニ保證スル條約ノ各條文ハ右二個ノ借受方法ニ付キ區別スル所ナキヤ否ニ付キ新聞紙上ニ於テ意見ヲ闘ハセタルコトハ閣下ニ於テモ定メテ御承知ノコトト存候

露國ノ經濟機關タル露清銀行ハ横濱ニ於テ土地ヲ借受ケ商店事務所用家屋ヲ建築セントヲ希望致居候處本件ニ付キ

三六三 明治三十一年九月三日 青木外務大臣ヨリ  
送第三十三號 露國公使宛  
本邦駐劄露國公使

横濱在留外國人等ノ間ニ疑惑ヲ生シ居候折柄故在日本露國臣民ハ貴我新條約ニ依リ日本民法ノ規定ニ從ヒ地上權取得ノ權利ヲ享有スルヤ否ニ付キ正當ノ見解ヲ承知致度旨該銀行ヨリ本使ニ申出候

本使ノ見ル所ニ據レハ賃貸借契約モ地上權契約モ只タ土地借受ニ關スル特定ノ方法ニ過キシシテ二者等シク住居、工業及商業用ノ建物建築ノ爲メ日本國ニ於テ土地借受ノ權利ヲ露國臣民ニ保證スル千八百九十五年ノ露、日ノ條約第二條ノ豫見スル所ニ可有之ト存候右ハ日本帝國政府ノ解釋ニ符合スルモノナルコトハ本使ノ信シテ疑ハサル所ニ有之候得共爲念右解釋ノ正當ナルヤ否ニ付キ御回報ヲ煩シ度候右御依頼旁本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

一千八百九十九年六月八日

青木外務大臣ヨリ  
露國公使宛

乍併内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テハ前記條約ノ規定ニヨリ露國人ニモ地上權ヲ許與セサルヘカラス條約ニ所謂「借受」ノ原語 Jouer ハ民法上賃借ノ意味ニ用キラルルトハ雖モ其ノ故ヲ以テ假令内國法ニ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テモ賃借權以外ハ條約上露國人ニハ要求權ナシトイハ餘り Judicial ニシテ條約ノ眞意ニハ非サルヘシ條約ノ規定ニ於テハ通俗的ニ汎ク土地ヲ借受クルコトヲ得ト記載シタルモノニシテ其權利ハ必ス賃借權ニ限ル意味アリトハイヒ難シ住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルハ寧ロ地上權（他人ノ土地ニ於テ工作物又ハ竹木ヲ所有スル爲メ土地ヲ使用スル權利）ノ設定タル場合普通ナリト思ハル

上述ノ論旨ヲ約スレハ左ノ如シ

一 條約規定ハ直ニ地上權ナルモノヲ許與シタリトハイフヘカ  
二 然レトモ内國法ニ於テ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テハ條約規定ニヨリ露國人ニモ之ヲ許與セサルヘカラス  
三 尤モ右ノ場合ニ於テモ條約上ハ只住居及商業ノ爲ニスル地上權ノミ之カ許與ヲ請求シ得ルニ過キ

日露通商航海條約第二條第一項中「住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得」トアルハ各締盟國ノ内國法ノ認ムル借地方法ニヨリ借地シ得ルコトノ意味ニシテ即チ住居及商業ノ爲メニ借地方法ハ内國法ノ規定ニ一任シ如何ナル體様借地權ヲ設クヘキカニ就テハ内國法ハ右條約規定ノ爲メ毫モ束縛セラルコトナシ同項但書ニ「内國臣民ト同様其ノ國法律ヲ遵守スルコトヲ要ス」トアルニテモ明カナリサレハ我内國民法ニ於テ借地上例ハ地上權ナルモノヲ認メサル場合ニハ露國人ハ借地契約ニヨリテ地上權者タルコト能ハサルハ内國人ト異ナルコトナシ日露條約第二條第一項中「住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得」ノ規定ハ直ニ地上權ナルモノヲ許與シタルモノナリトハイフヘカラス

右ノ點ハ何レニセヨ前記往復書翰中ニハ「獨逸帝國臣民ハ條約第一條及同第三條ニ掲載シタル目的ヲ達セムカ爲メ其ノ時々ニ行ハル國法上ノ規定ニ從ヒ内國臣民ト均ク長期ノ借地權、地上權其ノ他土地ニ關スル物權ヲ取得スルコトヲ得」トアリテ地上權ナルモノヲ明記セリ然レトモ此規定モ直ニ地上權ナルモノヲ獨逸國民ニ許與シタルモノニハ非シテ畢竟其時ノ内國法ノ規定ニ遵依シテ土地ニ關スル人權及物權ヲ取得スルコトヲ得ルノ意味タルニ過キス即チ如何ナル體様ノ物權ヲ設クヘキカニ就テハ内國法ハ右規定ノ爲メニ毫モ束縛セラルコトナシサレハ我内國民法ニ於テ地上權ナルモノヲ認メサル場合ニハ獨逸國民ハ地上權者タルコト能ハサルハ内國人ト異ナルコトナシ然レトモ内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テハ前記規定ニヨリ獨逸國人ニモ地上權ヲ許與セザルヘカラス畢竟地上權ニ關シテハ前記公文ノ規定アルトモ獨通商航海條約第三條第一項中「住居工業及商業ノ爲ミニ土地ヲ借受クルコトヲ得」ノ規定以上ノ保障ヲ與フルコトハナシト信ス然レトモ日露條約第二條第一項ニ所謂「借受」louerハ賃借ノ意味ノ字ナレハ該項ノ規定タケニテハ露國人ハ假令我内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テモ之カ許與ヲ要求スル條約上ノ逸國臣民ハ條約第一條及同第三條ニ掲載シタル目的ヲ達セムカ爲メ地上權ヲ取得スルコトヲ得」トアリテ右條約第三條カ通商航海ニ關スル規定ナリトイヒ得ル以上ハ「イヒ得ヘシト信ス」日露條約第十四條ノ規定ニヨリ露國人ハ前記日獨間公文ノ規定ニ均霑シ内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テハ獨逸國人カ之カ許

與ヲ條約上要求シ得ルト同様露國人モ條約上之カ許與ヲ要求シ得ヘシ而シテ此場合ニ於テハ其根據ハ日獨間公文ニ發シタルモノナルヲ以テ帝國臣民ハ露國内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニ於テモ條約上之カ許與ヲ請求スル權利ナシサレハ何レニセヨ帝國内國法カ地上權ナルモノヲ認ムル場合ニハ條約上露國人ニモ之ヲ許與セザルヘカラサルモノトセハ寧ロ日露條約第二條第一項ノ解釋上内國法カ地上權ヲ認ムル場合ニハ帝國臣民ハ露國ニ於テ又露國臣民ハ帝國ニ於テ條約上地上權ノ許與ヲ請求シ得ルトスル方我ノ爲ミニ利益ナリ即チ本件ニ關スル回答トシテハ只「帝國臣民カ貴國法令ニ從ヒ帝國ニ於テ地上權ヲ取得シ得ルト同様貴國臣民モ帝國法令ニ從ヒ帝國ニ於テ之ヲ取得シ得ル儀ニ候」ト淡泊ニ答フル方可然ト存候

### 三六四 明治三十一年三月一日 北海道長官ヨリ

外國人墓地處分ニ關シ稟請

附屬書一 千八百九十九年十一月十五日附露國領事代

二 千九百年一月十七日附露國副領事代理書翰  
内務省回議ニ對スル外務省附箋

號外  
客年七月改正條約實施ニ際シ函館港外國人墓地ノ内明治三十一年十月付證書ヲ以テ各國領事ニ貸渡シタル分ハ特定ノ私

人又ハ社團法人等ノ名儀ヲ以テ借受ノ事ヲ望マサル儀ニ候ハハ該墓地ハ幽館區ニ於テ引渡ヲ受ケ管理スヘキ筋ニ付其趣旨ニ依リ更ニ借受人ヲ定メ候様各國領事ト協議可致旨御訓示有之則チ其旨ニ依リ各國領事ニ談判シタルニ過半ハ之ニ應シ墓地存續借用願書ヲ提出シタルニ拘ハラス獨リ露國領事ハ再三談判ヲ重タルモ之ニ應セス該國公使ニ經伺ノ上ニアラサレハ出願スルト否トハ確答シ難キ旨ヲ以テ其儘遷延シ結局客年十一月十五日付及本年一月十七日付ニテ

(括書類) 内務大臣侯爵 西 鄉 從 道 殿  
ノ墓地トシテ今後トモ繼續使用スヘキコトハ希望スル所ナルモ西曆一千八百九十五年ノ日露條約第十七條ニ依リ既ニ彼ニ於テ該墓地ヲ使用スルコトノ權利ヲ有スルモノナルニヨリ更ニ借用願書ヲ提出スルコトハ難致云々右ハ露國公使ノ

訓令ニ基キ可申進旨ノ公書ニ接セリ然ルニ御訓示ノ旨ニ仍レハ該外國人墓地彼ニ於テ此際更ニ借受人ヲ定メサル以上

ハ幽館區ニ於テ其墓地ヲ引受ケ管理スル外無之候得共日露改正條約第十七條ニ依リ露國公使ノ旨ヲ受ケ同國領事ノ異議ヲ唱フル點モ亦一理無キニアラス之ニ對シ直ニ御訓示ノ

### 附屬書一

丙號 譯文

第一百二十號

註

右ニ對シテハ別紙外務省附箋案文ノ通り通牒セラレ

タリ

北海道廳長官男爵 園 田 安 賢

内務大臣侯爵 西 鄉 從 道 殿

拜啓去ル千八百七十年十二月五日在幽館帝國領事ニ於テ記名セシ會議ノ條項ニ仍リ日本政府ヨリ幽館ニ於テ露國正教會ノ墓地トシテ使用ヲ許可セラレタル一部ノ地所ハ今後トモ繼續スヘキ事ハ我等ノ希望ニ有之候右ハ在東京露西亞帝

國公使館ヨリノ訓令ニ基キ本官ヨリ御報告ニ及ヒ候尤モ該墓地ノ體裁ヲ維持スル爲メ要スル費用ハ我等ニ於テ支拂フヘキ義務アルモノト思考致候 敬具

## 領事代理

ゼツト、ボリアノウスキ一

## 附屬書二

千九百年一月十七日（露曆五日）

北海道廳長官代理

龍岡信熊 貴下

拜啓陳ハ千八百九十九年十二月二十八日付貴翰ニ對シ御回答トシテ左ニ申進候

在東京露西亞帝國公使館ノ訓令ニ基キ露國ニコライ主教ハ在函館露國正教會ノ墓地ヲ從前ノ如ク處理シ且ツ同氏ハ該

墓地管理人トシテ既ニ適當ノ者ヲ撰定セリ此管理人撰定ノコトハ公然昨年九月貴官ニ御報道致置候旨ニコライ主教ヨリ本官ニ申立有之候サレハ貴簡ニ添ヘテ御差越ノ書式ニ依リ主教ニコライ或ハ其他ノ者ヲシテ北海道廳長官園田男爵

参考 明治三十三年二月八日附内務省ノ回議ニ對スル外務省附箋別紙

## 副領事代

ゼツト、ボリアノウスキ一

（前略）貸與地ヲ當初貸與ノ目的ニ永久供用保存スヘキコトハ條約ノ保障スル所ナリト雖モ改正條約實施後ハ墓地ノ管理ハ我監督取締ノ下ニ行ハルヘキ儀ナルヲ以テ彼レニ於テ管理人ヲ定メ我監督取締ノ下ニ立タシムルカ或ハ管理方法ヲモ凡テ我レニ委スルヤラ決定スルニテ足レリ因テ左ノ通改案訓示ヲ望ム

案

本年二月一日號外ヲ以テ外國人墓地處分方ニ關シ稟請相成候處客年七月十五日房庶甲第二〇〇號嘗省次官通牒本文ノ趣旨ハ函館港外國人墓地ノ内各國領事ニ貸渡シタル分ハ改

註 右附箋ノ通り二月二十八日内務省ニテ裁決通牒アリ  
タリ

ニ宛テ願書ヲ提出セシムル様トノ御希望ニ對シテハ遺憾ナラレ而シテ在函館露國正教會ヲシテ該墓地ヲ使用スルコトノ權利ヲ我等ニ保證セラレ候又千八百七十年十二月五日ノ證據書ハ前記墓地ノ維持費等ニ付テハ更ニ關係ナシトノ特權ヲ日本政府ニ保證セラレ居候

前陳ノ次第ニテ此場所ノ契約ハ既ニ數年前成立シ函館ニ於ケル日露政府ノ代表者ニ於テ署名セラレ居ルモノニ候得ハ更ニ願書ヲ以テ北海道廳長官ニ提出セシムル様主教ニコライ或ハ其他ノ者ニ御來示ノ件傳達難相成候 敬具

## 在函館

年 月 日  
北海道廳長官殿

正條約實施後ト雖トモ依然當初貸與ノ目的ニ供用保存スヘキハ勿論ニ有之候得共右墓地ノ管理ハ帝國政府監督取締ノ下ニ行ハルヘキ様照會ニ有之候間特定ノ私人ヲ以テ管理人ト定メ届出ツヘキ様照會シ若シ之ヲ希望セサレハ函館市ヲシテ管理方法ヲ定メシムヘシトノ趣旨ニ有之候條右趣旨ニ依リ更ニ露國領事ト協議相成可然候間命ニ依リ此段及通牒候也